1965年～1976年購入テキスト

	書　　名	著　　者	発 行 所
1	橋のない川　第1～6部	住井すゑ	新潮社
	級友が私だけを避け、仲間はずれにする。差別—その深い罪について人はどれだけ考えただろうか。故なき差別の鉄の輪に苦しみ、しかもなお愛を失わず、光をかかげて真摯に生きようとする人々がここにいる。大和盆地の小村、小森。日露戦争で父を失った誠太郎と孝二は、貧しい暮しながら温かな祖母と母の手に守られて小学校に通い始める。だがそこに思いもかけぬ日々が待っていた。　（「BOOK」データベースより）		
2	渋江抽斎	森鴎外	宝文館出版
	渋江抽斎（1805-58）は弘前の医官で考証学者であった。「武鑑」収集の途上で抽斎の名に遭遇し、心を惹かれた鴎外は、その事跡から交友関係、趣味、性格、家庭生活、子孫、親戚にいたるまでを克明に調べ、生きいきと描きだす。抽斎への熱い思いを淡々と記す鴎外の文章は見事というほかない。鴎外史伝ものの代表作。（「BOOK」データベースより）		
3	岡田嘉子　終わりなき冬の旅	工藤正治	双葉社
	この一巻は、まさに、多事をきわめた明治末期から大正にかけての日本の社会史であり、革命以後におけるソ連の文化を語るもので、単なる岡田嘉子個人の自伝ではない。—岡田嘉子の自伝に寄せて（深尾須磨子）—		
4	苦海浄土　わが水俣病	石牟礼道子	講談社
	工場廃水の水銀が引き起こした文明の病・水俣病。この地に育った著者は、患者とその家族の苦しみを自らのものとして、壮絶かつ清冽な記録を綴った。（「BOOK」データーベースより））		
5	恍惚の人	有吉佐和子	新潮社
	文明の発達と医学の進歩がもたらした人口の高齢化は、やがて恐るべき老人国が出現することを予告している。老いて永生きすることは果して幸福か?日本の老人福祉政策はこれでよいのか?—老齢化するにつれて幼児退行現象をおこす人間の生命の不可思議を凝視し、誰もがいずれは直面しなければならない“老い”の問題に光を投げかける。空前の大ベストセラーとなった書下ろし長編。（（「BOOK」データーベースより））		
6	背教者ユリアヌス	辻邦生	中央公論社
	宿命の不思議にみちびかれ——古代異教世界の崩壊に出会う哲学者皇帝ユリアヌス。歴史の奔流に棹さす人間帝王の劇的な生涯を重厚明晰な文体で描破し、本年度最高の文学的成果と絶賛される一大叙文学。（帯より）		
7	悔いなき命を	岡田嘉子	広済堂出版
	1938年、杉本良吉とともに起こした「樺太の日ソ国境越境事件」で、当時の暗い世相の中に衝撃と共にロマンも与えた女優・岡田嘉子の自伝。		
8	サンダカン八番娼館　底辺女性史序章	山崎朋子	筑摩書房
	“からゆきさん”—戦前の日本で十歳に満たない少女たちが海外に身を売られ、南方の娼館で働かされていた。そうした女性たちの過酷な生活と無惨な境涯を、天草で出会ったおサキさんから詳細に聞き取り綴った、底辺女性史の名著。（「BOOK」データベースより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
9	日本沈没　上・下	小松左京	光文社
	伊豆・鳥島の東北東で一夜にして小島が海中に没した。現場調査に急行した深海潜水艇の操艇者・小野寺俊夫は、地球物理学の権威・田所博士とともに日本海溝の底で起きている深刻な異変に気づく。折から日本各地で大地震や火山の噴火が続発。日本列島に驚くべき事態が起こりつつあるという田所博士の重大な警告を受け、政府も極秘プロジェクトをスタートさせる。小野寺も姿を隠して、計画に参加するが、関東地方を未曾有の大地震が襲い、東京は壊滅状態となってしまう。全国民必読。二十一世紀にも読み継がれる400万部を記録したベストセラー小説。　（「BOOK」データベースより）		
10	きけわだつみの声　1集	日本戦没学生記念会	光文社
	僕は、本書が、あらゆる日本人に、とくに最近の、戦争のことを忘れてけろりとしている人々に、のんきに政争ばかりしている政治家に、文化生活を謳歌する紳士淑女に、深遠な学理にふける大学教授に、命令一下白い棍棒や長い竿をふるう警官に、娯楽雑誌以外は本など読まぬ実業家に、そして今の学生諸君に…読まれてほしいと思う。（表紙裏より）		
11	アラスカ物語	新田次郎	新潮社
	エスキモーのリーダーとなり、アラスカの救世主と呼ばれた一日本人フランク安田の波乱の生涯を描く力作700枚！（帯より）		
12	安土往還記	辻邦生	筑摩書房
	争乱渦巻く戦国時代、宣教師を送りとどけるために渡来した外国の船員を語り手とし、争乱のさ中にあって、純粋にこの世の道理を求め、自己に課した掟に一貫して忠実であろうとする“尾張の大殿（シニョーレ）”織田信長の心と行動を描く。ゆたかな想像力と抑制のきいたストイックな文体で信長一代の栄華を鮮やかに定着させ、生の高貴さを追究した長編。（新潮社ホームページより）		
13	小説「複合汚染」への反証	岩本経丸　ほか	国際商業出版
	小説『複合汚染』の虚構を鋭く指摘し、“汚染”の事実の姿を読者に提示する病める公害社会ニッポンへの警鐘!!（帯より）		
14	洟をたらした神	吉野せい	彌生書房
	阿武隈山麓の荒地を夫と共に開墾しつつ戦前戦後にわたる極度の貧困の日日を生き抜いた一人の農婦のみずみずしい人生の切り口を示す衝撃の作品集。第6回大宅壮一賞・第15回田村俊子賞受賞。（彌生書房ホームページより）		
15	複合汚染　上・下	有吉佐和子	新潮社
	工業廃液や合成洗剤で河川は汚濁し、化学肥料と除草剤で土壌は死に、有害物質は食物を通じて人体に蓄積され、生まれてくる子供たちまで蝕まれていく…。毒性物質の複合がもたらす汚染の実態は、現代科学をもってしても解明できない。おそるべき環境汚染を食い止めることは出来るのか？　小説家の直感と広汎な調査により、自然と生命の危機を訴え、世間を震撼させた衝撃の問題作！　（新潮社ホームページより）		
16	冬の道	入江道子	婦人高知
	生きていたことのしるしにと、恥も外聞もなく無器用な生きざまを、人目にさらすことになりました。殊に両親の裏面をしるしたことについての痛みが続きます。封建制度と戦争の理不尽さを書きたかったからでした。（「あとがき」より）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
17	細川ガラシャ夫人	三浦綾子	主婦の友社
	明智光秀の娘として何不自由なく育てられた玉子は、16になった時、織田信長の命令で細川忠興のもとに嫁ぐこととなった。女性が男性の所有物でしかなく、政略の道具として使われた時代に、玉子は真の人間らしい生き方を求めて行く…。実の親子も殺し合う戦国の世にあって、愛と信仰に殉じた細川ガラシャ夫人。その清らかにして熾烈な悲劇の生涯を浮き彫りにした著者初の歴史小説。（「BOOK」データベースより）		
18	於雪　土佐一条家の崩壊	大原富枝	中央公論社
	時は戦国乱世――男たちの野心と死闘の中で愛する者のために切支丹信仰に救いを求める一人の女性の生きざまを描く。（中央公論社ホームページより）		
19	限りなく透明に近いブルー	村上龍	講談社
	米軍基地の街・福生のハウスには、音楽に彩られながらドラッグとセックスと嬌声が満ちている。そんな退廃の日々の向こうには、空虚さを超えた希望がきらめく―。著者の原点であり、発表以来ベストセラーとして読み継がれてきた、永遠の文学の金字塔。群像新人賞、芥川賞受賞のデビュー作。（「BOOK」データーベースより）		
20	雲は天才である	石川啄木	角川書店
	代用教員としての故郷渋民村での生活は、啄木の人生、思想、文学とその発展に最初の生活的社会基礎をあたえた。表題作は未完に終わっているが、自らの生活苦を通じて触れた社会の矛盾を洞察しようとする萌芽がみられ、おさえきれぬ詩人の反逆精神と、貧しい人々への清潔な愛情がみなぎっている。他に、「葬列」「漂白」「鳥影」を収む。（表紙裏より）		
21	人間の骨	土佐文雄	東邦出版
	革命詩人・槇村浩の生涯！稀世の神童として遠く海外にまでその名を馳せ、左翼弾圧の嵐の中を、反戦革命詩人としての魂を非転向によって守りつつも、その身はわすか二十六歳にして特高権力によって抹殺された槇村浩の生涯。――暗黒の夜空に非愴な光芒を放つ彗星にも似た誇り高くも苛烈な生涯を描く長篇小説。（帯より）		
22	はるかなる仔熊の森	ロバート・F・レスリー	草思社
	この感動的な記録はよくある動物愛情物語をはるかに超えている。人間は熊のようには生きられない、というインディアンの言葉が胸をうつ。（京都大学教授・日高敏隆）（帯より）		
23	漂流	吉村昭	新潮社
	江戸・天明年間、シケに遭って黒潮に乗ってしまった男たちは、不気味な沈黙をたもつ絶海の火山島に漂着した。水も湧かず、生活の手段とてない無人の島で、仲間の男たちは次次と倒れて行ったが、土佐の船乗り長平はただひとり生き残って、１２年に及ぶ苦闘の末、ついに生還する。その生存の秘密と、壮絶な生きざまを巨細に描いて圧倒的感動を呼ぶ、長編ドキュメンタリー小説。（「BOOK」データベースより）		
24	めぐりあい	大原富枝	中央公論社
	戦犯と悲惨な過去にさいなまれる女二人。戦争の傷跡を抱く人々のはかない邂逅を描く。（帯より）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
25	落日燃ゆ	城山三郎	新潮社
	東京裁判で絞首刑を宣告された7人のA級戦犯のうち、ただ一人の文官であった元総理、外相広田弘毅。戦争防止に努めながら、その努力に水をさし続けた軍人たちと共に処刑されるという運命に直面させられた広田。そしてそれを従容として受け入れ一切の弁解をしなかった広田の生涯を、激動の昭和史と重ねながら抑制した筆致で克明にたどる。（「BOOK」データベースより）		
26	私の渡世日記　上・下	高峯秀子	朝日新聞社
	女優・高峰秀子は、いかにして生まれたか—複雑な家庭環境、義母との確執、映画デビュー、養父・東海林太郎との別れ、青年・黒沢明との初恋など、波瀾の半生を常に明るく前向きに生きた著者が、ユーモアあふれる筆で綴った、日本エッセイスト・クラブ賞受賞の傑作自叙エッセイ。（「BOOK」データベースより）		

1977年購入テキスト一覧

	書　　名	著　　者	発 行 所
27	円地文子全集　６	円地文子	新潮社
	『女坂』は稀有の傑作であると私は思う。特に、白川倫というこの小説の主人公の姿が、その、本妻みずからの妾探しという特異さの故だけでなく、強い印象を私に与えたのは、そこに明治期の女性の典型が、そしてそれを通してひとつの普遍的な女性像ともいうべきものが、くっきりと描かれていたからである。（高見順）（「解題」より）		
28	セーヌ左岸で	犬養道子	中央公論社
	雑誌『暮しの設計』に連載したパリ生活二年間の記録の中から、二十篇をえらんで1冊にまとめた。日常身辺の品々や、実際に病気になって体験した保険制度のことなどからはじまって、出来るだけ具体的卑近な生活記録をと思いつつ（「あとがき」より）		
29	黄昏のロンドンから	木村治美	PHP研究所
	英国はいまなぜ〝斜陽の国〟なのか―ロンドン滞在中の日本人家族が体験する人間的触れ合いとハプニング。鋭い観察眼がとらえた英国病の、種々相。大宅賞受賞作。（「BOOK」データベースより）		
30	翼は心につけて	関根庄一	一光社
	ガンと闘って死んだ十五歳の少女が教えてくれたこと（サブタイトル）		
31	一粒の涙を抱きて	高史明	毎日新聞社
	日本の親鸞から世界の親鸞へ！名著「生きることの意味」等で知られる著者が、最愛のひとり息子の自死を代償に、前人未到の親鸞思想の確信にせまる…全国民待望の書。（帯より）		
32	日の移ろい	島尾敏雄	中央公論社
	「日の移ろい」には事件を書こうとはせず、登場人物も「私」のほかに「妻」と二人の子どもと一少女に限った。主人公は鬱自身ででもあったろうか（「あとがき」より）		
33	まむしの周六	三好徹	中央公論社
	明治新聞人”黒岩涙香”の気骨と覇気。喰いついたら離れない「まむしの周六」と畏怖された涙香が、「萬朝報」を舞台に、敢然と富と権力に向かって新聞道を貫く姿を活写する傑作長篇。（帯より）		
34	湖の伝説	梅原猛	新潮社
	画家・三橋節子の愛と死。人間を追究する衝哭と英知の書。ガンのため右腕を切断した女流画家。迫りくる死を直視しながら左手で描き出したものは何か？雄渾の筆が解明する感動の人間論！（帯より）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
35	野生の証明	森村誠一	角川書店
	山村で起こった大量殺人事件の三日後、集落唯一の生存者の少女が発見された。少女は両親を目前で殺されたショックで“青い服を着た男の人”という以外の記憶を失っていた。多くの人命を奪った事件であったが、まったく手がかりは残されていなかった。しかし意外な所から、事件の糸口が見つかり…。人間の心奥に潜んだ野性を鋭く追求し、映画化され大反響を呼んだ傑作“証明”シリーズ。（「BOOK」データベースより）		
36	私は教師	内田八郎	金高堂書店
	高知市民図書館が「教育に生きる」をだしてくださってから4年たった。次は「学芸十五年」を書くつもりだったところ、高知新聞学芸部長松田忠吉氏のおすすめがあったもので、その方はすっかり解体してしまって現れでたのがフクションたっぷりの連鎖「私は教師」であった。（「はしがき」より）		
37	私は忘れない	有吉佐和子	新潮社
	スターを夢見る大部屋女優が、南海の孤島で厳しい自然に立ち向かって、困難な僻地教育に取り組む素朴な島民にふれ、真の人生に目覚める過程を描く。他に、「海鳴り」「蚊と蝶」を収録。（帯より）		

1978年購入テキスト一覧

	書　　名	著　　者	発 行 所
38	静かなドン　1～3	ショーロホフ	河出書房新社
	この作品をソヴィエト文学不朽の傑作たらしめている点はどこにあるのか？それは作者が革命の実相を力づよく描き出すと同時に、作の主人公グリゴーリー・メレホフの力づよい人間像をこの作品で打ち出すことに成功した点にあるのだと私は考える。―訳者の言葉（横田瑞穂）―		
39	小説　野中兼山　上・中・下	田岡典夫	平凡社
	構想十余年、愈々成った著者畢生のライフワーク。数奇な運命を辿った、江戸時代初期の土佐藩執政野中兼山とその一族を描く歴史小説の巨篇！（帯より）		
40	素直な戦士たち	城山三郎	新潮社
	教育ママの執念によって幼稚園から受験戦争に駆り出される子供たち！この家族の悲喜劇は他人事ではない。（帯より）		
41	西欧の顔を求めて	犬養道子	文藝春秋
	ヨーロッパを知るには「そこに住み、生活し、民俗にふれ、風土に親しむ事」という信念の著者が探りあてた真のヨーロッパとは？ヨーロッパ精神史研究の意欲評論。（「BOOK」データベースより）		
42	寵児	津島佑子	河出書房新社
	ピアノ教室の講師をする女は、離婚して娘と暮している。娘は受験を口実に伯母の家に下宿して母親から離れようとしている。体調の変化から、ある日女は妊娠を確信する。戸惑う女が男たちとの過去を振返り自立を決意した時、妊娠は想像だと診断され、深い衝撃を受ける。自立する女の孤独な日常と危うい精神の深淵を“想像妊娠”を背景に鮮やかに描く傑作長篇小説。（「BOOK」データベースより）		
43	日本悪妻に乾杯	深田祐介	文藝春秋
	亭主は頭で、女房は軀で、社務に精励を強いられる海外駐在員夫婦の、滑稽な日常生活。軽妙なタッチで、サラリーマンの哀歓を見事に描いた著者初の長篇小説。（帯より）		
44	果て遠き丘	三浦綾子	集英社
	自分だけが幸福でありたい香也子。その冷酷なエゴイズムの嵐が北国の町・旭川に吹き荒れ、実の姉の愛までも壊そうとしていた…！（帯より）		
45	螢川	宮本輝	筑摩書房
	ようやく雪雲のはれる北陸富山の春から夏への季節の移ろいのなかに、落魄した父の死、友の事故、淡い初恋を描き、蛍の大群のあやなす妖光に生死を超えた命の輝きをみる芥川賞受賞作。（（「BOOK」データーベースより））		

	書　　名	著　　者	発 行 所
46	祭りの場	林京子	講談社
	如何なれば膝ありてわれを接しや—。長崎での原爆被爆の切実な体験を、叫ばず歌わず、強く抑制された内奥の祈りとして語り、痛切な衝撃と深甚な感銘をもたらす林京子の代表的作品。群像新人賞・芥川賞受賞の『祭りの場』、「空缶」を冒頭に置く連作『ギヤマンビードロ』を併録。　（（「BOOK」データーベースより））		
47	乱紋　上・下	永井路子	文藝春秋
	織田信長の妹・お市と近江の雄・浅井長政の間には三姉妹がいた。長女・お茶々は、秀吉の側室として権力をふるった後の淀君。次女・お初は京極高次の妻となり、大坂の陣で微妙な役割を演じる。そして、最も地味でぼんやりしていた三女・おごう。彼女には、実に波乱に満ちた運命が待っていた—。おごうの生涯を描く長篇歴史小説。（「BOOK」データベースより）		
48	私の浅草	沢村貞子	暮しの手帖
	針供養、駄菓子屋、物売りの声、どんどん焼き、セルの着物、ヘチマの水、初詣で、初午、花まつり、三社祭、お酉さま、羽子板市、路地の朝の味噌汁の香り…。どこかなつかしく暖かい町、浅草。浅草に生まれ育った著者が、東京下町の人々の人情あふれる暮らしぶりと、子供たちの生活、四季折々の町の表情、そして亡き父母、兄弟の思い出を細やかな筆で綴った珠玉のエッセイ74編。（「BOOK」データベースより）		

1979年購入テキスト一覧

	書　　名	著　　者	発 行 所
49	一弦の琴	宮尾登美子	講談社
	一弦琴に人生を託した女ふたりの運命を、移りゆく歳月のなかに流麗細緻な筆で描く。（帯より）		
50	冤罪	後藤昌次郎	岩波書店
	清水局事件　青梅事件　弘前事件　冤罪論 冤罪は、いうまでもなく、天災ではなく人災である。しかも、国家権力による災害である。それは、戦争とともに、国家という最高権力しかなしえない、おそろしい災害である。（「はしがき」より）		
51	黒い雨／駅前旅館	井伏鱒二	新潮社
	一瞬の閃光とともに焦土と化したヒロシマ。不安な日々をおくる閑間重松とその家族…彼らの被爆日記をもとに描かれた悲劇の実相。原爆をとらえ得た世界最初の文学的名作。 （「BOOK」データベースより）		
52	子供達の復讐　上・下	本多勝一	朝日新聞社
	すべて表現されたもの（文も絵も音楽も）には表現者の視点があり、「立場のない立場」というものは存在しません。このルポで私が努めて立ちたいと思った視点は、自殺あるいは殺された子供の立場であります。むろん、かれらが意識していたかどうかとは関係なく、この民族的悲劇の犠牲となって死んでいった子供たち—開成高校生殺人事件でいえばA少年、祖母殺し高校生殺人事件でいえばB少年—の目で、親を見、先生を見、社会を見てみたいと思いました。（「BOOK」データベースより）		
53	時雨の記	中里恒子	文藝春秋
	二十年ぶりの再会がふたりの心に火をともした。——熟年の男と女が、命を限りに燃えた美しく切ない恋を典雅に描く恋愛小説の名作 。（「BOOK」データベースより）		
54	芝桜　上・下	有吉佐和子	新潮社
	津川家の正子と嶌代は将来の看板芸者と目されていた。しかし、二人の性格は全く対照的だった。実直で健気、芸者の通信簿でも総牡丹（全甲）をもらうほど頭のいい正子。美しく信心深いところがありながら、水揚げ前に不見転で客をとり、嘘を本当と言いくるめて次々に男をかえていく嶌代。—二人の芸者の織りなす人生模様、女同士の哀歓を絢爛たる花柳界を舞台に描く。（「BOOK」データーベースより）		
55	宣告　上・下	加賀乙彦	新潮社
	「あす、きみとお別れしなければならなくなりました」死刑囚楠本他家雄は、四十歳の誕生日を目前にしたある朝、所長から刑の執行宣告を受ける。最後の夜、彼は祈り、母と恋人へ手紙を書く。死を受容する平安を得て、彼は翌朝、刑場に立つ…。想像を絶する死刑囚の心理と生活を描き、死に直面した人間はいかに生きるか、人間は結局何によって生きるのかを問いかける。（「BOOK」データベースより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
56	夏目漱石全集　7	夏目漱石	角川書店
	我々と前後した年齢の人々には、漱石先生の「それから」に動かされたものが多いらしい。その動かされたという中でも、自分がここに書きたいのは、あの小説の主人公長井代助の性格に惚れこんだ人々のことである。その人々の中には惚れこんだどころか、みずから代助を気取った人も少なくなかったことと思う。しかしあの主人公は、我々の周囲を見回しても、めったにいなそうな人間である。（巻末「同時代人の批評」—芥川龍之介—より）		
57	遠き落日　上・下	渡辺淳一	角川書店
	留学費を一夜の遊蕩で使いはたした大胆さ、肉体的ハンデを克服するための超人的努力…。医師・野口英世の知られざる素顔を、8年の歳月をかけて描破。吉川英治文学賞受賞。（「BOOK」データベースより）		
58	晩夏	シュティフター	集英社
	遠く緑の葉陰に教会の塔が見える。めざすロールベルクの村までは、あともう少し—だが、先ほどから急速に黒い雲が拡がり始め、今にも雷雨の来そうな空模様になった。旅の青年は、街道を離れ、雨宿りを求めて、丘の上の屋敷へ続く道を登り始める。青年の運命は、この時から、大きく変わって行くのも知らずに…。オーストリア・アルプス山麓に美しく建つ「薔薇の家」を舞台に、物語は、ゆっくりと、急ぐことなく、静かに進んで行く。やがて押し寄せてくる激しく深い感動…。トーマス・マンが「世界文学のなかでも最も奥深く、最も内密な大胆さを持ち、最も不思議な感動をあたえる—」と評した作家の最高傑作。　（「BOOK」データベースより）		
59	北極圏一万二千キロ	植村直己	文藝春秋
	人間の極限に挑んだ男・ウエムラ。ブリザードを冒す！ツンドラを懸ける！白熊の恐怖と闘う！極地犬だけを友としてグリーンランドからカナダ、そしてアラスカまで走りぬいた今世紀最大の抒情詩！（帯より）		

1980年購入テキスト一覧

	書　　名	著　　者	発 行 所
60	植木枝盛と女たち	外崎光広	ドメス出版
	植木枝盛は自由民権運動の理論的指導者として有名だが、彼は多彩な女性と交流を重ねたことでも知られている。安政四年（一八五七）に枝盛を生んだ女からはじまって、明治二五年に謎の死を遂げるまでの彼と交流のあった女性を、枝盛の婦人解放運動の理論や運動を背景にしながら取り上げた叙述（「はしがき」より）		
61	海も暮れきる	吉田昭	講談社
	咳をしても1人＊之でもう外に動かないでも死なれる＊肉がやせて来る太い骨である　いったんはエリートコースを歩みながら、やがて酒に溺れ、美しい妻に別れを告げ流浪の歳月を重ねる。小豆島で悲痛な死を迎える放哉の生涯を鮮烈に描く。（「BOOK」データベースより）		
62	絵本とは何か	松居直	日本エディタースクール出版部
	「こどものとも」をはじめとする数多くの絵本を編集し、日本の絵本・児童出版に新たな境地を拓き、今日の福音館書店を築いた著者が、保育の現場との数千回に及ぶ対話をもとに、心をこめて語る絵本の魅力。（巻末・紹介文より）		
63	絵本をみる眼	松居直	日本エディタースクール出版部
	「絵本とはなにか」につづく絵本論第二集。「てぶくろ」「ぐりとぐら」「ティッチ」「スーホーの白い馬」「ばけくらべ」など225点に及ぶ絵本をとりあげ、その具体的な作品を細かく分析しながら、“よい絵本”であるための物語の条件、さし絵の条件、作家・画家の資質などを考え、子どもが喜ぶ絵本とは何かを考える。絵本は幼児に文字を教える道具ではなく、何よりも楽しむものであることを本書は教える。（巻末・紹介文より）		
64	おはん／雨の音	宇野千代	新潮社
	ロマンス小説のまず第一の要件は、何といっても、華やかな魅力をそなえたヒーロー、ヒロインの登場と活躍にある。その意味では「雨の音」も「おはん」も、日常のレベルを1段も2段もぬきん出た男女が溌剌と息づいて、独得の情緒のリズムで伸びやかに行動してみせる（佐伯彰一・解説より）		
65	思い出トランプ	向田邦子	新潮社
	浮気の相手であった部下の結婚式に、妻と出席する男。おきゃんで、かわうそのような残忍さを持つ人妻。毒牙を心に抱くエリートサラリーマン。―日常生活の中で、誰もがひとつやふたつは持っている弱さや、狡さ、後ろめたさを人間の愛しさとして捉えた13編。（「BOOK」データベースより）		
66	神々の夕映え	渡辺淳一	講談社
	治癒の見込みのない重度障害児の手術中、医師村中は一瞬の空白に襲われる。危険な手術を執拗に求めた母親の中には子供の死を願う気持ちがあったのではないか？末期癌の苦悶や、植物人間を抱えた極限状態で、死は最後の救いなのか？生と死の選択を委ねられる医師の側から安楽死の意味を問う長編問題作！（「BOOK」データベースより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
67	神の汚れた手　上・下	曽野綾子	朝日新聞社
	「中絶手術は、戦後最大の産業であり、今日の繁栄は、ひとえに産婦人科医のおかげ」という説も生まれる中絶天国・日本。その数は三千五百万、大韓民国一国分くらいの人口を抹殺したことになる…中絶は果して悪か？湘南の小さな産婦人科医院を舞台に展開されるさまざまなドラマを通して真の生命の尊厳を訴える衝撃の問題作。（「BOOK」データベースより）		
68	雁の寺／金閣炎上	水上勉	新潮社
	事件が起きて、三十年近くなるのだが、私は犯人の林養賢君と縁も深かったし、所在も近かったので、彼がなぜ金閣に放火したか、そのことを、つきつめて考えてみたかった。だが本当のことはいまもわからない。（「あとがき」より）		
69	極限の民族	本多勝一	朝日新聞社
	エスキモー、ニューギニア高地人、アラビア遊牧民。現代の古展としての評価が決定した、世界の水準を抜く雄大なスケールの記録文学。（帯より）		
70	珈琲館影絵	大原富枝	講談社
	ここにまとめられた作品のすべてに出てくる女たちは、みんなもう若くはない女たちである。人生をすうっと歩いて来て、ふと足を止めないではいられない、そのような季節の女たちであって、誰のものでもない自分だけの足跡をそこに振返っている。（「あとがき」より）		
71	小僧の神様　他十編	志賀直哉	岩波書店
	志賀直哉は、他人の文章を褒める時「目に見えるようだ」と評したという。作者が見た、屋台のすし屋に小僧が入って来て一度持ったすしを価を言われて置いて出て行った、という情景から生まれた表題作のほか、「城の崎にて」「赤西蛎太」など我孫子時代の作品を中心に11篇を収めた、作者自選の短篇集。（「BOOK」データベースより）		
72	侍	遠藤周作	新潮社
	藩主の命によりローマ法王への親書を携えて、「侍」は海を渡った。野心的な宣教師ベラスコを案内人に、メキシコ、スペインと苦難の旅は続き、ローマでは、お役目達成のために受洗を迫られる。七年に及ぶ旅の果て、キリシタン禁制、鎖国となった故国へもどった「侍」を待っていたものは—。政治の渦に巻きこまれ、歴史の闇に消えていった男の“生”を通して、人生と信仰の意味を問う。（「BOOK」データベースより）		
73	死の受容　ガンと向きあった365日	吉岡昭正	毎日新聞社
	ガンと対決したある医学者の手記。自らの死を確信した医学部教授は何を思い何を為したか？未来の医学教育・医療制度はどうあるべきかを鋭く示唆しながら、壮絶な闘病の現実を克明に記録した遺稿。（帯より）		
74	小説　内申書裁判	小中陽太郎	光文社
	尾花沢昇は高校受験をすべて不合格となった。内申書に政事活動を書かれたためである。なぜ昇がこうなったのか——。この事件は実際に区立麹町中学校で起こった、受験戦争の歪みが生んだ悲劇である。裁判にまで発展した教育の矛盾をつき波紋を投げかける告発小説。（帯より）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
75	天平の甍	井上靖	中央公論社
	天平時代、日本の仏教に戒律をもたらすために、遣唐使船で唐に渡った4人の留学僧の運命と、幾たびの苦難にもめげず渡海来日を遂げる唐の名僧鑒真の壮烈な生涯をえがいた歴史小説の名編。（「BOOK」データベースより）		
76	母ふたりの記	豊田穣	三笠書房
	「亡き母への鎮魂、義母との確執…著者の血の根源を求める長い取材の旅は終った」長男が発病して以来、母の家系を探って、血の根源をつきつめるというのは、私のかねての念願であった。今回、その取材を終り、一つの作品にまとめてみて、私はある種の安息を感じると共に、悲しみをも感じている。（「あとがき」より）		
77	鳳仙花	中上健次	作品社
	紀州の海はきまって三月に入るときらきらと輝き、それが一面に雪をふりまいたように見えた。フサはその三月の海をどの季節の海よりも好きだった。三月は特別な月だった。（本文より）		
78	密航船水安丸	新田次郎	講談社
	無償の情熱に生きた開拓者アメリカ及甚（おいじん）の劇的生涯！待つのは栄光か悲惨か。及川甚三郎が率いる82人の密航者は明治39年、帆船で新天地カナダへ向かった。（帯より）		
79	ライ麦畑でつかまえて	J.D.サリンジャー	白水社
	少年の夢と激情は、大人たちの欺瞞を許すことができない—。歯切のよい文体で少年の心理を描きあげたサリンジャーの傑作。（「BOOK」データベースより）		
80	流民伝	李恢成	河出書房新社
	民生が帰国したのは、共和国で第二の人生を送るためであった。だが、もう一つ、三十歳になった民生の胸底には、別れて久しい樺太の母親や弟妹たちと北朝鮮の故郷で合流しようというねがいがあった。彼は十七歳のときにサハリン（樺太）を出、それ以来、親の消息を知らない。（本文より）		

1981年購入テキスト一覧

	書　　名	著　　者	発 行 所
81	アメリカのありふれた朝	ジュディス・ゲスト	集英社
	薄いガラスのような感受性を持つ17歳の少年コンラッドの試練！自殺未遂のあと、8ヶ月の精神病院生活を経て、コンラッドが家に帰ったとき、すべてが変っていた。過保護ともいえる父親の態度、母親のよそよそしさ、級友たちの好奇と軽蔑のまなざし。孤独と無力感は色濃くなるばかり…。でもコンラッドは歩きはじめた。”愛”だけを信じて。（帯より）		
82	海揚り	井伏鱒二	新潮社
	この集の数篇は、三、四年前に書いた「兼行寺の池」以外は、それを書き終わる前後の頃に書いた私の見聞実記である。但、「ブキテマ三又路と柳重徳のこと」及び「微員時代の堺誠意一郎」の二篇は、今から三十何年前に於ける自分の微用時代の戦争体験記である。（「序」より）		
83	栄女記	中野文枝	泰樹社
	百年の埋木　今日ぞ花薫る。幕末維新の風雲児、阪本龍馬一。その次姉「栄」は何故自害し、密葬されたか?!秘められた悲壮なその生涯を、初めて解き明かす。（帯より）		
84	遠雷	立松和平	河出書房新社
	押し寄せる都市化の波打ち際で、時代に抗して大地に生きる青年の、土着の闇と現代の空白に突き立てる奔放な生命のほとばしり――時代の状況を骨太構想の中に搦めとり、たくましい若者像をつくりだして、新しい立松文学の地平を拓いた注目の力作。（帯より）		
85	女のいい分	丸岡秀子	日本経済評論社
	この中の一篇一篇はいま農家にあって、営農担当者としての責任をとりしきっている婦人たちの姿と心そのものです。婦人層ぜんたいの活力ある象徴とさえ見られる、その立場での創意・工夫は、わたしたちの心を打ち続けてきました。（「まえがき」より）		
86	月山	森敦	河出書房新社
	自らに沈黙と流浪の人生を課した不羈の魂が、四十年の星霜を経て＜死の山＞月山の淵源に刻み上げた稀有の名篇。（帯より）		
87	吉里吉里人	井上ひさし	新潮社
	東北の一寒村が突如日本から分離独立した！老若男女が痛烈にして珍無類の活躍。おかしくも感動的な新国家を描き、大国日本の問題を鋭く撃つ、全編ユーモア、爆笑また爆笑の大百科。（帯より）		
88	金せん花と秋の蝶　囚われの女たち2	山代巴	径書房
	『霧氷の花』が呼び起こした深く鈴かな感動が、いま、日本の大地を徐々に、だが確かにゆさぶり始めた。愛が、たましいが、再生する――。（帯より）		
89	小さな貴婦人	吉行理恵	新潮社
	悪意に満ちた外界に傷つけられる繊細な存在の交感を詩的散文に結晶させた、優雅で奇妙な連作小説集。芥川賞受賞作。（「BOOK」データーベースより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
90	土佐一条家の秘宝	土佐文雄	作品社
	関白一条家はなぜ華やかな京の都を離れ、黒潮の接岸する僻地・土佐へと赴いたのか？南国土佐に数百年、今も眠り続ける一条家の秘宝とは何か？———財宝探しという現代のロマンに憑かれた男たちの歴史への探索行きを雄大に描く書下ろし長編歴史小説！（帯より）		
91	なんとなくクリスタル	田中康夫	河出書房新社
	最先端の風俗を生きる、女子大生の自由な日々を書き、クリスタル族の出現と、一大センセーションをまきおこした話題のベストセラー。（帯より）		
92	人間万事塞翁が丙午	青島幸男	新潮社
	呉服問屋が軒をつらねる東京・日本橋堀留町の仕出し弁当屋“弁菊”。人情味豊かであけっぴろげ、良くも悪くもにぎやかな下町に、21歳で嫁いできたハナは、さまざまな事件に出遭いながらも、持前のヴァイタリティで乗り切ってゆく。—戦中から戦後へ、激動の時代をたくましく生きた庶民たちの哀歓を、自らの生家をモデルにいきいきと描き出した、笑いと感動の下町物語。直木賞受賞。（「BOOK」データベースより）		
93	秀吉と利休　一隅の記	野上弥生子	新潮社
	勢威並ぶものなき天下の覇王秀吉と、自在な境地を閑寂な茶事のなかに現出した美の創造者利休。愛憎相半ばする深い交わりの果てに宿命的破局を迎える峻烈な人間関係を、綿密重厚な筆で描き切る、絢爛たる巨篇。（「BOOK」データベースより）		
94	ママ・グランデの葬儀	G. ガルシア＝マルケス	国書刊行会
	コマンドの地母神ともいうべきママ・グランデの葬儀を、奇想に満ちた途方もなく誇張的な文体で描いたこの作品は、まとまりがよく、見たところは簡潔平明に描いているようで何かしら複雑なものを内に秘めているほかの短編とは対照的である。—ガルニシアマルケスを巡って（桑名一博）—		
95	マリー・アントワネット	ツワイク	河出書房新社
	どこと言って非凡なところなどない人間に、歴史は大きな役割をふりあてることがある。虚名のみ高く、毀誉褒貶半ばするマリー・アントワネット。ツワイク(1881-1942)はその生涯を、あるいは王家の寝所の秘事に、あるいは国民議会の緊迫した局面にと巧みな筆運びで追い、ひとりの平凡人に凝集する壮大な歴史のドラマを展開する。（「BOOK」データベースより）		
96	娘はばたけ	三好京三	文藝春秋
	書店を営む子のない夫婦が中学生の養女を迎えた。高校進学に、あわい恋情に、ゆれうごく思春期の微妙な少女の心理にふれて、「子育て」のむつかしさを描く長篇小説。（「BOOK」データベースより）		
97	霧氷の花　囚われの女たち　1	山代巴	径書房
	無類の面白さ、感動の巨編！サーカスの女芸人あがりの窃盗、スリの女親分、娼婦、放火犯、子殺し、親殺し…。そして戦争に反対してとらえられた吉野光子。その出会いがもたらした深い連帯の原理が、新たな人間の世紀を開く日を、私たちは待ち、望まずにいられない。（帯より）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
98	夜と霧　ドイツ強制収容所の体験記録	フランクル	みすず書房
	心理学者、強制収容所を体験する—飾りのないこの原題から、永遠のロングセラーは生まれた。“人間とは何か”を描いた静かな書。（「BOOK」データベースより）		

1982年購入テキスト一覧

	書　　名	著　　者	発 行 所
99	青い目の見た幕末　歴史と教育	岡崎豊	岡崎豊
	思いつくままに、これまで書きためたものを、小冊子にまとめてみた。第1部は、歴史に関するもの、第2部は、海外の教育事情に関するもの、第3部は、高校生の保護者向けに書いた「青年期の心とからだ」以外は、すべて、読書に関する思い出、紹介、随筆、論説などを収録したものである。（「あとがき」より）		
100	悪魔の飽食	森村誠一	光文社
	これは日本が戦争という国家的集団発狂に取り憑かれた時代に、他国民に対して犯した残虐の記録である。世界最大規模の細菌戦部隊・関東軍第七三一部隊は日本陸軍が生んだ悪魔の部隊であり、戦史の空白であった。（「作者のことば」より）		
101	いくさ世を生きて　沖縄戦の女たち	真尾悦子	筑摩書房
	戦後36年、基地と観光の島と化してしまった沖縄で、女であるがゆえに負わなければならなかった過去に口を固く閉ざし、沖縄戦の深い傷痕をかかえて生きてきた女たちが、ひとりひとりの命こそが宝である世の中を願って、いまその胸のうちを語る。（「BOOK」データベースより）		
102	姥ざかり	田辺聖子	新潮社
	娘ざかり、女ざかりを過ぎてもオンナには、輝く季節が待っている—何故シルバーシートは片隅にしかないのか、年寄りらしく生きよ、気がねをせよとは何ごとぞ、わび、さび、枯淡の境男などマッピラゴメン、若いもんに煙たがられようとも言いたい放題、やりたい放題、姥よ、今こそ遠慮なく生きよう！胸をはり、誰はばかることなく己が道を行く76歳歌子サンの姥ざかり。（「BOOK」データベースより）		
103	母（エミ）	伊興吉	新潮社
	民族の源泉である母親像を鮮烈に描く韓国文学界俊鋭の書き下ろし作品。文化交流の歴史に新しいページを開く！（帯より）		
104	女の一生　一部・キクの場合	遠藤周作	朝日新聞社
	幕末から明治の浦上切支丹大弾圧を背景に、流刑の若者清吉を慕うキクのひたむきな恋。「BOOK」データベースより）		
105	開幕ベルは華やかに	有吉佐和子	新潮社
	犯罪は演劇的だ。帝劇の、華やかな舞台の裏に進行する、もう一つの愛と憎しみのドラマ。数多くの名舞台の演出家として劇場の隅々まで知り尽くした小説の名手有吉佐和子が、初めて描く舞台裏の凝縮された熱気と狂気。（帯より）		
106	かさぶた式部考	秋元松代	河出書房
	海尊と名乗る法師が村々を懺悔し流浪するという東北の貴人伝説を背景に、学童疎開し孤児となった啓太の罪の生涯を描く田村俊子賞、芸術祭賞受賞「常陸坊海尊」、和泉式部に纏る伝説を題材に、九州の炭坑事故で冒された豊市、その母と嫁に、式部の後裔という魔性の尼僧を絡め社会の底辺に生きる人々の深い哀しみを描く毎日芸術賞受賞「かさぶた式部考」、方言を駆使し民衆の苦悩に迫る戯曲二篇。（「BOOK」データベースより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
107	伽羅の香	宮尾登美子	中央公論社
	三重の山林王の一人娘として何不自由なく育った葵は、従兄と結ばれ、二児にも恵まれた。しかし、その幸福な結婚生活も束の間、夫の急逝、両親の相つぐ死、二児の死と次々に不幸に襲われる。失意の底にあった葵が見出したものは、日本の香道の復興という大事業への献身であった…。度重なる不幸から立ち直り香道の復興に一身を献げた女の生涯。（「BOOK」データベースより）		
108	錦繍	宮本輝	新潮社
	「前略　蔵王のダリア園から、ドッコ沼へ登るゴンドラ・リフトの中で、まさかあなたと再会するなんて、本当に想像すら出来ないことでした」運命的な事件ゆえ愛し合いながらも離婚した二人が、紅葉に染まる蔵王で十年の歳月を隔て再会した。そして、女は男に宛てて一通の手紙を書き綴る—。往復書簡が、それぞれの孤独を生きてきた男女の過去を埋め織りなす、愛と再生のロマン。（「BOOK」データベースより）		
109	慶州ナザレ園　忘れられた日本人妻たち	上坂冬子	中央公論社
	日韓史の生証人となった妻たち。故郷を捨て、海を渡り、戦乱を生き抜いた妻たちは、いま、古都慶州の片隅にひっそりと生きる。二国の谷間に忘れられた妻たちの悲劇。（帯より）		
110	朱夏　上・下	宮尾登美子	集英社
	果してまだ、日本はあるのか…？同郷の土佐から入植した開拓団の子弟教育にあたる夫、生後まもない娘と共に、満州へ渡った綾子は十八歳。わずか数カ月後、この地で敗戦を迎えることになろうとは。昨日までの人間観・価値観はもろくも崩れ去り、一瞬にして暗転する運命、しのび寄る厳寒。苛酷無比、めくるめく五百三十日を熟成の筆で再現、『櫂』『春燈』と連山を組む宮尾文学の最高峰。（「BOOK」データベースより）		
111	出家とその弟子	倉田百三	新潮社
	一高在学中から西田幾多郎に傾倒し、のち宗教文学に一境地を拓いた倉田百三（一八九一-一九四三）の代表作。浄土真宗の開祖親鸞を主人公とした本書は、生き方に悩む人々の心を捉え、のち各国語に訳され、海外にも数多くの読者を得た。（「BOOK」データベースより）		
112	序の舞　上・下	宮尾登美子	朝日新聞社
	くれ竹の夜にゆれる螢日、愛と芸術のはざまに劇しくもえて…。文化勲章を女性で初めて受けた女流画家、上村松園の生涯に材を得た長篇小説。（帯より）		
113	テレーズ・デスケールー	フランソワ・モーリヤック	青山社
	著者と作品の盛名についてあらためて言挙げすることはない。。『テレーズ・デスケールー』は夙に知られた逸品、テレーズはすでにほとんど永遠の女性である。なぜテレーズは夫に毒を盛ろうとしたのか。疑問はすでに読者をして幾分かテレーズたらしめる。それこそ、作中のテレーズが自らの謎を覗き込んで執拗に尋ね続け苦しみ続けた疑問に外ならぬからだ。（「あとがき」より）		
114	破船	吉村昭	筑摩書房
	嵐の夜、浜で火を焚いて沖行く船をおびき寄せ、坐礁した船から積荷を奪う——サバイバルのための苛酷な風習が招いた海辺の悲劇！（新潮社ホームページより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
115	ヒロシマ日記	蜂谷道彦	法政大学出版局
	『ヒロシマ日記』は、被爆当時のメモをもとに八月六日から九月三〇日までの五六日間の体験を日記風に記録したもので、逓信医学協会発行の機関誌『逓信医学』第二巻第一号～第四号（昭和二五～二七年）に一二回にわたって連載された。これは英訳されて米国で大きな反響を呼び、のち独仏伊など一〇数カ国語に翻訳された。（「BOOK」データベースより）		
116	本覚坊遺文	井上靖	講談社
	師千利休は何故太閤様より死を賜り、一言の申し開きもせず従容と死に赴いたのか？弟子の本覚坊は、師の縁の人々を尋ね語らい、又冷え枯れた磧の道を行く師に夢の中でまみえる。本覚坊の手記の形で利休自刃の謎に迫り、狭い茶室で命を突きつけあう乱世の侘茶に、死をも貫徹する芸術精神を描く。（「BOOK」データベースより）		
117	もう一つの出会い	宮尾登美子	海竜社
	人生をかえた三十八歳ゼロからの出発。波瀾の軌跡から掬い上げた生きるということ愛するということ。宮尾登美子珠玉のずいひつ集装いも新たに、今甦る。（「BOOK」データベースより）		
118	揚梅の熟れる頃	宮尾登美子	文化出版局
	『ミセス』編集部から土佐の四季を、という以来があったとき、私は単なる土佐の風物だけでなく、私の体のなかにも流れている土佐の女性の血と情熱を、それらにたくして描きたいと思いました。酒、料亭、おへんろさん、日曜市、長尾鶏等々、昔から伝えられてきた土佐の名物と、それにからんだ女性の話を描いてみたのですが（「あとがき」より）		
119	わが一期一会	井上靖	毎日新聞社
	人間・事件・風景・美術・言葉—これら森羅万象との生涯一度の稀有な出会い。この一期一会に託して、作家の心奥と創作の接点を率直に吐露した、井上文学の代表的エッセイ（帯より）		

1983年購入テキスト一覧

	書　　名	著　　者	発 行 所
120	「雨の木」を聴く女たち	大江健三郎	新潮社
	荒涼たる世界と人間の魂に、水滴をそそぐ「雨の木」。優雅で荘厳な現代の黙示録。（「BOOK」データベースより）		
121	生きて行く私　上・下	宇野千代	毎日新聞社
	明治、大正、昭和、平成と生き抜いてきた女流作家が、波乱の人生行路を率直に綴る。山口県岩国の生家と父母の記憶から書き起こし、小学校代用教員の時の恋と初体験、いとことのはじめての結婚、新聞懸賞小説の入選、尾崎士郎との出会いと同棲、東郷青児、北原武夫とつづく愛の遍歴。「スタイル」社の束の間の隆盛と倒産のように時代の波にも揉まれながら、たゆみなく創作をつづけ、ひたむきの前を向いて歩いてきた姿が心を打つ。その生き方のなかに、長寿の秘訣もかいま見える。（「BOOK」データベースより）		
122	いつもと同じ春	辻井喬	河出書房新社
	百貨店の社長として激烈な経済競争の世界に身をおきながら、なお文学的繊細さと迷いを抱いて生きる著者の懊悩を描く。平林たい子文学賞受賞。（「BOOK」データベースより）		
123	失われた祖国	ジョイ・コガワ	二見書房
	五歳の少女ナオミの家族に忍び寄る戦争の影…。第二次大戦のさ中「敵国人」として苛酷な運命を強いられた、日系カナダ人の迫害の真相とは。詩情溢れる豊かな描写で、歴史の闇に封印されたもうひとつの悲劇を、静かに、そして鮮烈に告白する自伝的長篇。（「BOOK」データベースより）		
124	おばあさんの知恵袋	桑井いね	文化出版局
	ひとりのおばあさんをご紹介します。主婦としてつつましく生きてきた、典型的な明治の女、いねさん。むかしの生活、家事の工夫を振り返る、おばあさんの思い出話に、しばらくお付き合いください。（「BOOK」データベースより）		
125	家族	吉田とし	理論社
	どんな家族であろうと、大なり小なりの問題や亀裂を抱えているはず。富士の麓に引っ越してきた六人家族の一年が、高校生・杏子の目を通して瑞々しく描かれる、時に危機をはらみながら…。けして古びないテーマである「家族の崩壊と再生」が新鮮によみがえる。（「BOOK」データベースより）		
126	幻化（梅崎春生集　新調日本文学41）	梅崎春生	新潮社
	私は、戦争文学というのは、単なる散文文学ではなくて、時には抒情詩として成立もさせ得るし、また濃密な味を持つロマンとして仕立てることもできる、文学上の特異なジャンルだと思っている。私が「桜島」や「日本の果て」の世界、また「幻花」のもつ高雅で哀切な思想を愛するのもそのためである。このことについてだけでも、氏の生前にひとことなりと、私は語りたかったと思う。（伊藤桂一・月報より）		
127	サハリンへの旅	李恢成	講談社
	自己形成の原点—サハリンへの2週間の“帰郷”の実現。祖母、義姉、親族、同胞達との交歓。言葉なき言葉—“陸封”34年を隔て異郷の地に再会した離散一族、民族の“それぞれの立場”を抱擁し、アイデンティティ同一性を真摯に追求しつづける、李恢成積年の願望—パルチャ（運命）の旅。（「BOOK」データベースより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
128	春雷	立松和平	河出書房新社
	敗けていくのだと満夫は思った。何かよくわからないものに父祖の地を追われていくのだ。—土地を手離し、崩壊の進む農村、都市化の波に抗してハウス栽培に賭ける満夫と若い人妻あや子、家を捨てて女と暮している父親松造とその家族…。あの「遠雷」の人々が再び歩きはじめた。“物語”の世界を超え、異形と化した現代の闇を映す立松文学の代表作、野間文芸新人賞「遠雷」の続篇。（「BOOK」データベースより）		
129	少年の闇　歎異抄との出会い1	高史明	径書房
	朝鮮の人々が、かつて「日本人」として生きねばならなかったなかで受ける差別と蔑視。そのような環境での一少年の非行悪道、青年期の革命運動のなかでの葛藤、結婚…愛児の自死。その果てに著者が出会ったもの……親鸞。自己に対する深いきびしさが、生きとし生けるものへの深いやさしさ、大いなる愛に至る。その道筋を克明に描ききる真の文学。（「BOOK」データベースより）		
130	旅路　自伝小説	藤原てい	読売新聞社
	戦後の超ベストセラー『流れる星は生きている』の著者が、30年の後に、激しい人生の試練に立ち向かう苦闘の姿を描く、感動の半生記。自伝小説。（「BOOK」データベースより）		
131	チョッちゃんが行くわよ	黒柳朝	主婦と生活社
	“自然”から生まれてきたようなおテンバの女の子、物事にこだわらずいつも行動的なチョッちゃん。（「BOOK」データベースより）		
132	積木くずし	穂高隆信	桐原書店
	親子三人の一年余りの事柄を書き上げた家族崩壊の記録。（「BOOK」データベースより）		
133	寺田寅彦郷土随筆集　生誕百年記念増補改訂	寺田寅彦	高知市教育委員会
	回想文学としてまことに優れたものである。稀に見る記憶の確実な人であるので何十年をへだてて描かれた物でも実に正確で、今日の我々の前に明治二十年代の土佐の姿を如実に再現してくれる。本文は岩波（戦後）版の全集文学編を定本として、郷土関係作品全二十六編を同全集そのままに再刻し、これに郷土的事項についての注解を索引として加えることにした。（「あとがき」より）		
134	燈台鬼	南條範夫	文藝春秋
	行方不明の父を求めて渡唐した男がふと目にしたものは、頭に十本の蝋燭を立てられた店“人間燭台”のおぞましい姿だった。（「BOOK」データベースより）		
135	楢山節考	深澤七郎	中央公論社
	「お姥（んば）捨てるか裏山へ　裏じゃ蟹でも這って来る」雪の楢山へ欣然と死に赴く老母おりんを、孝行息子辰平は胸のはりさける思いで背板に乗せて捨てにゆく。残酷であってもそれは貧しい部落の掟なのだ——因習に閉ざされた棄老伝説を、近代的な小説にまで昇華させた。（「BOOK」データベースより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
136	虹立つ	吉本青司	新潮社
	この小説の舞台は、高知県幡多郡西土佐村の珠木小学校であります。過疎の為閉校になるまでの教師と児童たち、それを見守る村人たちの哀歓を、一学校長の目を通して描いたものであります。（「後記」より）		
137	23分間の奇跡	ジェームス・クラベル	集英社
	「みなさん、おはよう。わたしが、きょうからみんなの先生ですよ」と新しい先生がいった。時間はちょうど9時だった。その女教師は“最初の授業”で、いったい何を教え、そして子供たちは、23分間でどう変わったのか―？自由とは、国家とは、教育とは何か、読者ひとりひとりに問題を提起する。（「BOOK」データベースより）		
138	人間の大地	犬養道子	中央公論社
	繁栄と豊かさにおぼれた私たちは、世界の飢えた子供らの死に手をかしてはいないだろうか。現在そして未来をおびやかす飢餓の正体を真剣に考えぬ限り、私たちも21世紀まで生きのびることはできない。今、この全地球的脅威に対し、何をただちになすべきかを示す。（「BOOK」データベースより）		
139	ひとすじの道　第一部	丸岡秀子	偕成社
	里親の乳房にすがり祖父母のもとで育つ恵子…仮借なく立ちはだかる運命の嵐といたいけな命との格闘は、読者に痛烈な感動を与えます。（帯より）		
140	二つの祖国　上・中・下	山崎豊子	新潮社
	日米開戦！日系人は敵なのか。強制収容所で、アメリカへの忠誠テストに揺れる天羽一家。（「BOOK」データベースより）		
141	文化　人間を創る	青木妙伊子	ささら書房
	全国ではじめて、福岡の地に産声をあげた子ども劇場おやこ劇場――その十八年のあゆみは、いま、劇場数三八〇、会員四十万人を数える。その劇場とともに歩んだ人生から生まれた文化論。（「SASARA/CULTURE/BOOKS巻末・紹介文」より）		
142	窓ぎわのトットちゃん	黒柳徹子	講談社
	「君は、本当は、いい子なんだよ」。トモエ学園のユニークな教育とそこに学ぶ子供たちをいきいきと描いた名作。（「BOOK」データベースより）		
143	寄りかかっては生きられない　男と女のパートナーシップ	千葉敦子	光風社
	男が本当に幸福でなければ女は幸福になれず、女が不幸な状態に置かれ続ける限り男も真に幸福になれません。たとえ男が従順な女中役を務めてきた女を失い、女が三食昼寝つきの安楽さを失うとしても、男女の新しい関係がもっと人間らしく愛に満ち、そして自由なものであるためにどうあったらいいかを考えてみたい。（「BOOK」データベースより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
144	竜馬がゆく 立志篇	司馬遼太郎	文藝春秋
	維新史上の奇蹟といわれる、坂本竜馬の劇的な生涯を中心に、同時代をひたむきに生きた若者達の群像を描く長篇歴史小説。（「BOOK」データベースより）		

1984年購入テキスト一覧

	書　　名	著　　者	発 行 所
145	新しい人よ眼ざめよ	大江健三郎	講談社
	神秘主義詩人ウィリアム・ブレイクの預言詩に導かれ、障害を持って生まれた長男イーヨーとの共生の中で、真の幸福、家族の絆について深く思いを巡らす。無垢という魂の原質が問われ、やがて主人公である作家は、危機の時代の人間の“再生”を希求する。新しい人よ眼ざめよとは、来たるべき時代の若者たちへの作者による、心優しい魂の呼びかけである。大江文学の一到達点を示す、感動を呼ぶ連作短篇集。（「BOOK」データベースより）		
146	菊慈童	円地文子	新潮社
	人が老いて生きるとは何なのだろうか。養女夫婦に家を追い出され、若い男に情愛を傾け死んでいった84歳の田之内せき。菊水を飲み、八百年美童の姿を保ったという「菊慈童」を80歳を過ぎた今、最後の力で演じようとしている能役者桜内遊仙。70半ばの女流作家香月滋乃の眼に映る様々な“老い”の姿を通して、老年の内部に潜む妖しい妄執を描き、芸術と官能の深奥を探る。（「BOOK」データベースより）		
147	くちたんばのんのんき（口丹波呑呑記）	田島征彦	晶文社
	京都は丹波の山里で暮らす絵本作家の、ほろ苦くも心暖まる絵日記。（「BOOK」データベースより）		
148	月曜物語	ドーデ	岩波書店
	第一部は幼ない心に映じた敗戦国の悲哀を写した名編「最後の授業」を最初に、物語の舞台を普仏戦争及びコンミューヌ当時のパリとアルザスにとり、人情の機微、深刻な諷刺を詩趣豊かな文章に託し、第二部は多くの幻想や追憶を音楽的抒情的な筆致に託して、まだ見ぬ日本へのあこがれを語る「盲目の皇帝」に終る。一八七三年。（「BOOK」データベースより）		
149	孤高の人　上・下	新田次郎	新潮社
	昭和初期、ヒマラヤ征服の夢を秘め、限られた裕福な人々だけのものであった登山界に、社会人登山家としての道を開拓しながら日本アルプスの山々を、ひとりの疾風のように踏破していった”単独行の加藤文太郎”。その強烈な意志と個性により、仕事においても独力で道を切り開き、高等小学校卒業の学歴で造船技師にまで昇格した加藤文太郎の、交錯する愛と孤独の青春を描く長編。（「裏表紙」より）		
150	隅田川暮色	芝木好子	文藝春秋
	800年前の平家納経・厳島組紐の復元に心血を注ぐ冴子。この自らに忠実に生きる女性の運命の変転と、彼女をめぐる男たちの葛藤を、大川沿いの町に住む人々の哀歓をこめて描き《日本文学大賞》に輝く格調高い長篇小説。（「BOOK」データベースより）		
151	双影　芥川龍之介と夫比呂志	芥川瑠璃子	新潮社
	二人の天才の知られざる素顔。自分の母に手をついて挨拶する時、翼を拡げた大きな鳥のように見えた叔父・龍之介。宿痾と闘い、やって来る死に抵抗し挑戦し、燃え尽きた夫・比呂志。限りない愛をこめて書き下ろす感動の手記。（帯より）		
152	祖母、わたしの明治	志賀かう子	北上書房
	明治期の岩手に育ち、一児を抱いて宇都宮で初の女医となった志賀ミエの厳しくも清冽な生涯――。（帯より）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
153	大地の子エイラ　上・中・下	ジーン・アウル	評論社
	紀元前約三万年、大地震で両親を失った新人クロマニヨンの子エイラは、旧人ネアンデルタールの部族に拾われ育てられることになった…。大いなる運命の下に生まれ、稀有な才能を秘めるエイラをめぐり、遙か太古の人々の、壮大な愛と冒険とロマンが展開。世界中の熱い注目を沿びる、ベストセラー小説。（「BOOK」データベースより）		
154	旅人　湯川秀樹自伝	湯川秀樹	角川書店
	湯川秀樹博士自伝。幼少時代から中間子理論発表まで　―　その生活と心の軌跡を綴る、感動の回想記。（帯より）		
155	卡子（チャーズ）　出口なき大地	遠藤誉	読売新聞社
	1948年満州の夜と霧。戦後、中国の革命戦争さ中、長春（中国東北地方）で何が起こったか。7歳の女の子が地獄のチャーズをくぐり抜けた。（帯より）		
156	紬の里	立原正秋	新潮社
	紬と絣の研究をしている高階は、越後に旅して志保子を知った。夫に死別し、ひとり娘を育てながら、雪に埋もれてひっそり塩沢紬を織る志保子。しかし二人の愛は辛夷の花が散るように、もろくも崩れてゆく…。（裏表紙より）		
157	冷い夏、熱い夏	吉村昭	新潮社
	何の自覚症状もなく発見された胸部の白い影―強い絆で結ばれた働き盛りの弟を突然襲った癌にたじろぐ「私」。それが最悪のものであり、手術後1年以上の延命例が皆無なことを知らされた「私」は、どんなことがあっても弟に隠し通すことを決意する。激痛にもだえ人間としての矜持を失っていく弟…。ゆるぎない眼でその死を見つめ、深い鎮魂に至る感動の長編小説。（「BOOK」データベースより）		
158	天璋院篤姫　上・下	宮尾登美子	講談社
	激動の幕末維新、薩摩の島津家から徳川13代将軍家定に嫁いだ篤姫―しかしその結婚生活は、短く、そして常ならざるものであった…。2008年NHK大河ドラマ「篤姫」原作。（「BOOK」データベースより）		
159	閉ざされた庭	萩原葉子	新潮社
	高名な詩人の娘嫩は、「B29機帝都に侵入す」る戦時下、手縫いのワンピースを着、男の田舎の神社で式を挙げるが、初めの日から「真面目な人」のはずの夫と行き違う。互いに傷つけあい、ささくれ立った年月の末、不妊手術をし、戦後に離婚、自立するまでのアパート「木馬館」での生活。『蕁麻の家』に続く、自伝的長篇三部作の第二篇。（「BOOK」データベースより）		
160	夏の栞　中野重治をおくる	佐多稲子	新潮社
	一九七九年八月、作家中野重治が逝去した。中野重治に小説家として見出された佐多稲子は、この入院と臨終に至るまでの事実を、心をこめて描いた。そして五十年に亘る、中野重治との緊密な交友、戦前、戦中、戦後と、強いきずなで結ばれた文学者同士の時間を、熱く、見事に表現した、死者に対する鎮魂の書。（「BOOK」データベースより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
161	日本の面影	山田太一	日本放送出版協会
	日本古来のものの美しさに魅かれハーンが来日した明治半ば、日本は近代化の真っ只中。古きものと近代のせめぎあうこの時代、英語教師となったハーンをめぐる悲喜こもごもの人間模様や、『怪談』をまとめる原動力となった夫婦の細やかな情愛を描く。（「BOOK」データベースより）		
162	野上弥生子日記	野上弥生子	岩波書店
	大正十二年七月三十一日より、大正十四年一月十九日まで。「本書に収めるのは現存する最も古い時期のノート二冊分である。日記にみるように大正十二年夏、野上一家が日光湯元に避暑に行くところからはじまる。時に先生三十八才、夫豊一郎氏四十才、長男も素一氏十三才、次男茂吉郎氏一〇才、三男燿三氏五才という家族構成であった」（「後記」より）		
163	はちきんの唄　土佐方言詩集	片岡文雄	土佐出版
	土佐のオナゴシをうたう方言詩集!!　日本列島で一番元気があって、働き者で、少々のことではへこたれず、日本で一番愛らしい土佐のオナゴを、土佐のオトコシである詩人がたたえる方言詩集。（帯より）		
164	光抱く友よ	高樹のぶ子	新潮社
	大学教授を父親に持つ引っ込み思案の優等生・相馬涼子。アル中の母親をかかえ、早熟で、すでに女の倦怠感すら漂わせる不良少女・松尾勝美。17歳の2人の女子高生の出会いと別れを通して、初めて人生の「闇」に触れた少女の揺れ動く心を清冽に描く芥川賞受賞作。（「BOOK」データベースより）		
165	みみずの学校	高橋幸子	思想の科学社
	みみずの学校は、団地の主婦の井戸端会議から生まれた。鶏の絵に足を四本も書く子や、じゃがいもを果実のように木の枝にさがっているものだと思いこんでいる子が最近かなりいる。特に都会では、生活上大事なことの多くが目隠しされており、環境があげぞこになっている。（本文より）		
166	吉井勇の土佐	西村時衛	壷発行所
	歌人でもない私が吉井勇に興味を感じたのは、ほかでもなく、彼が土佐の韮生の猪野々を愛したという、いわばひとつの同類項のようなことからであった。（「あとがき」より）		

1985年購入テキスト一覧

	書　　名	著　　者	発 行 所
167	青桐	木崎さと子	文藝春秋
	乳癌にかかりながら、一切の医療をこばんで、叔母は逝った。その死を受容する姿を見つめるうち、姪の心にあった叔母へのわだかまりが消えてゆく。そして、精神の浄化をおぼえる彼女におとずれたものは。1本の青桐が繁る北陸の旧家での、滅びてゆく肉体と蘇る心の交叉を描く魂のドラマ。芥川賞受賞作品。（「BOOK」データベースより）		
168	演歌の虫	山口洋子	文藝春秋
	大ヒット曲を狙う各ディレクターの夢と挫折を描く表題作、旦那を持ち続ける元芸妓の心境を淡々と描く「老梅」など円熟の好短篇集。（「BOOK」データベースより）		
169	女の器量はことばしだい	広瀬久美子	リヨン社
	「ことばには魔力がある」といいます。でも、それが口先ばかりのリップサービスであったり、紋切り型にテクニックであったりすれば相手に敏感に伝わるもの。使い方を間違えると、同じことばを使っても、相手に逆に受けとられる場合もあるのです…。NHK人気アナウンサーによる、女性たちへ向けての生き方アドバイス。会話を楽しみ、出会いを楽しみ、そして人生を楽しみたいあなたへ。（「BOOK」データベースより）		
170	櫂　上・下	宮尾登美子	筑摩書房
	高知の下町に生れ育った喜和は、十五の歳に渡世人・岩伍に嫁いだ。芸妓紹介業を営み始めた夫は、商売にうちこみ家を顧みない。胸を病む長男と放縦な次男を抱え必死に生きる喜和。やがて岩伍が娘義太夫に生ませた綾子に深い愛をそそぐが…。大正から昭和戦前の高知を舞台に、強さと弱さを併せもつ女の哀切な半生を描き切る。作者自らの生家をモデルに、太宰治賞を受賞した名作。（「BOOK」データベースより）		
171	風の盆恋歌	高橋治	新潮社
	死んでもいい。不倫という名の本当の愛を知った今は—。ぼんぼりに灯がともり、胡弓の音が流れるとき、風の盆の夜がふける。越中おわらの祭の夜に、死の予感にふるえつつ忍び逢う一組の男女。互いに心を通わせながら、離ればなれに20年の歳月を生きた男と女がたどる、あやうい恋の旅路を、金沢、パリ、八尾、白峰を舞台に美しく描き出す、直木賞受賞作家の長編恋愛小説。（「BOOK」データベースより）		
172	気がつけば、騎手の女房	吉永みち子	草思社
	競馬に夢中の女子大生、ミチコの就職、恋愛、結婚。ミスターシービーの吉永騎手夫人が書いた、私の競馬青春期。（帯より）		
173	子どものからだとことば	竹内敏晴	晶文社
	からだのゆがみ、ねじれ、こわばり、など子どものからだこそ、子どもがさらされている危機のもっとも直接的な表現なのだ。分断せられ、孤立させられた「からだ」をすくいだし、ひらかれ、他人とふれあうための、からだとことばをとりもどす道をさぐる。（表紙裏より）		
174	サイゴンから来た妻と娘	近藤紘一	文藝春秋
	戦火のサイゴンで子連れのベトナム女性と結婚した記者が、家庭での小事件を通じアジア人の文化ギャップを軽妙に描く大宅賞受賞作。（「BOOK」データベースより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
175	さゝやく河　彫師伊之助捕物覚え	藤沢周平	新潮社
	元は凄腕の岡っ引、今は版木彫り職人の伊之助。定町回り同心石塚宗平の口説きに負けて、何者かに刺殺された島帰りの男の過去を探るはめに。綿密な捜査を進め、二十五年前の三人組押し込み強盗事件に辿りついた時、彼の前に現れたあまりにも意外な犯人と哀切極まりないその動機—江戸を流れる河に下町の人々の息づかいを鮮やかに映し出す長編時代ミステリー。シリーズ第三弾。（「BOOK」データベースより）		
176	性的黙示録	立松和平	リブロポート
	襲いかかる都市化の波に全てを奪われ、農業を捨てた青年がついに惹き起した殺人事件。名作『遠雷』『春雷』の主人公たちが織りなす悲喜劇を時代風俗の裡に重層的に描き、現代の“運命”を告知する感動の大河三部作完結篇。（「BOOK」データベースより）		
177	寺田寅彦覚書	山田一郎	岩波書店
	寅彦の父祖の事蹟、生いたち、漱石等との交流を克明にたどり、寅彦の人間形成とその文学の特質を明らかにする。著者自身も生れ育った寅彦の郷里高知への深い愛着と寺田文学への敬仰の念が生んだ畢生の労作。（「BOOK」データベースより）		
178	デンマーク日記　女性大使の覚え書	高橋展子	東京書籍
	私は一九八〇年五月から三年半あまりを、大使としてデンマークに過ごした。三年半という歳月は、短いものではないが、その間の生活は、日々新たであり、千変万化といってもよいもので、マンネリにおちいるひまはなかった。（「あとがき」より）		
179	時の止まった赤ん坊　上・下	曽野綾子	毎日新聞社
	入江茜が修道女としてアフリカ東南の島マダガスカルにやって来てから2年が過ぎた。彼女は修道院付属の産院で助産婦として多忙きわまる日日を送っている。産院には日夜大勢の産婦や患者がおとずれるが、貧困と飢餓が支配するこの国では、苦悩はあまりに大きい。出産にかかわる一切の費用は7000フラン=4200円で足りるが、それさえも満足に払えない人のほうが多いのだ…。（「BOOK」データベースより）		
180	土佐弁さんぽ	竹村義一	高知新聞社
	本書は明治の末葉に高知県中央部の香長平野に生まれ育った一人の土佐人の言語経験の回想記である。（「凡例」より）		
181	友よ／夏の花／原爆詩	林京子／原民喜　ほか	金の星社
	昭和20年8月15日、人々は炎に焼かれ、広島と長崎の町は廃墟となった—。次代を担う若い読者が、核と平和の問題を積極的に考えてくれることを願う「原爆文学」の傑作選。（「BOOK」データベースより）		
182	にごりえ／たけくらべ	樋口一葉	岩波書店
	落ちぶれた愛人の源七とも自由に逢えず、自暴自棄の日を送る銘酒屋のお力を通して、社会の底辺で悶える女を描いた『にごりえ』。今を盛りの遊女を姉に持つ14歳の美登利と、ゆくゆくは僧侶になる定めの信如との思春期の淡く密かな恋を描いた『たけくらべ』。（「BOOK」データベースより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
183	春の夢	宮本輝	文藝春秋
	亡き父の借財を抱えた大学生、井領哲之。大阪にあるホテルでのアルバイトに勤しむ彼の部屋には、釘で柱に打ちつけられても生きている蜥蜴の「キン」がいる—。可憐な恋人とともに、人生を真摯に生きようとする哲之の憂鬱や苦悩、そして情熱を一年の移ろいのなかにえがく、青春文学の輝かしい収穫。（（「BOOK」データーベースより））		
184	ひとひらの雪　上・下	渡辺淳一	文藝春秋
	若いOL・笙子と美貌の人妻・霞、二人のおんなのはざまでゆれうごく中年の建築家・伊織の心のひだ。不倫の愛と悦楽を描いて、大ベストセラーとなった話題の長篇力作。（「BOOK」データベースより）		
185	白夜を旅する人々	三浦哲郎	新潮社
	昭和の初めの東北、青森—。呉服屋〈山勢〉の長女と三女は、ある重い運命を負って生まれついた。自らの身体を流れる血の宿命に脅えたか、心労の果てに新たな再生を求めたか、やがて、次女は津軽海峡に身を投げ、長男は家を出て姿を消した。そして長女もまた…。必死に生きようとして叶わず、滅んでいった著者自身の兄姉たちの足跡を鎮魂の思いでたどる長編小説。（「BOOK」データベースより）		
186	広島第二県女二年西組	関千枝子	筑摩書房
	勤労動員にかり出された級友たちは全滅した。当日、下痢のため欠席して死をまぬがれた著者が、40年の後、一人一人の遺族や関係者を訪ねあるき、クラス全員の姿を確かめていった貴重な記録。（「BOOK」データベースより）		
187	堀辰雄集	堀辰雄	新潮社
	堀辰雄の作品のうちで、私のもっとも好きな作を挙げるとなれば、それは「風立ちぬ」である。ここに描かれた生のたたずまいの深い静かさと、悲しみをとおした美しさは、愛にとっての死の意味を極めようとしたところに形成されものである。（佐多稲子・解説より）		
188	道	林京子	文藝春秋
	一瞬の閃光によって生命を奪われてしまった、憧れの師よ、仲よき友よ—彼女たちへの鎮霊と自らの被爆体験を、娘、妻、母としての四十年の歳月の中に描く短篇集。（「BOOK」データベースより）		
189	森	野上弥生子	新潮社
	明治33年、15歳の菊地加根は九州から東京の森の学園・日本女学院に入学した。恋愛、友情、嫉妬—「新しい女性」の理想を掲げた自由な校風の下、加根を取りまく女学生たちの青春の姿が細やかに描きだされ、明治の群像が瑞々しく蘇る。女性たちの自立への歩みであると同時に、幕末から明治30年代に至る文化史でもある豊潤なロマネスク小説。近代日本の百年を生きた著者の畢生の大作。（「BOOK」データベースより）		
190	わがアリランの歌	金達寿	中央公論社
	一家離散後、十歳で渡日した著者は、たちまち差別の目に囲まれる。二年間だけ通った昼間の小学校では危く「金山忠太郎」にならずにすむが、職を転々とする間、この名前はついてまわる。念願の学生となり創作に取組む時、著者の「総主題」は定まっていた。肉親への思い、友情、そして恋愛も、差別との対峙と深く関わる。ユーモアを湛えた悠揚迫らぬ筆で描かれたこの半生記は、在日朝鮮人の苦闘の根を照し出してあますところがない。（「BOOK」データベースより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
191	ワルシャワ貧乏物語	工藤久代	文藝春秋
	豊かさとは何か、貧乏とは何か？物と心の間を改めて考えた七年間のワルシャワぐらし。自分でもやしを作り、豆腐をこしらえながら体得した、したたかな主婦の知恵。（「BOOK」データベースより）		

1986年購入テキスト一覧

	書　　名	著　　者	発 行 所
192	今はもう帰らない　中国残留日本人妻の四十年	松原一枝	海竜社
	女たちは生きる。戦争が残した悲惨な爪跡を魂の奥底に畳み込み、中国の大地に暮らしの根を張る。恩愛を胸に時の流れに棹さしながら、明日を生きる中国残留日本人妻たち。中国—日本、現地追跡取材による書き下ろしドキュメント！　（「BOOK」データベースより）		
193	岳物語	椎名誠	集英社
	山登りの好きな両親が山岳から岳から名付けた、シーナ家の長男・岳少年。坊主頭でプロレス技もスルドクきまり、ケンカはめっぽう強い。自分の小遣いで道具を揃え、身もココロもすっかり釣りに奪われてる元気な小学生。旅から帰って出会う息子の成長に目をみはり、悲喜こもごもの思いでそれをみつめる「おとう」…。これはショーネンがまだチチを見棄てていない頃の美しい親子の物語。（「BOOK」データベースより）		
194	続　岳物語	椎名誠	集英社
	ご存知、シーナさんちの岳少年。男の自立の季節を迎えている。ローバイしつつ、ひとりうなずく父親シーナ。子と父のやさしい時代が終わり、新しい友情物語が始まる。「岳物語」PART2。（「BOOK」データベースより）		
195	カリフォルニアの素敵な学校	石浜みかる	新潮社
	アメリカ西海岸、サンフランシスコ郊外の街パロアルトに、親子4人で一年と三か月、体験できることはすべて体験しようと始めた“強欲な暮らし”。子供たちの入学手続きに始まり、親自身にも授業を体験させる父母説明会、華やかなハロウィン・パーティーや、広大な自然の中でのキャンプ。親子一緒に感じ、考え、体験した生のアメリカを鮮やかに語る、実感的カリフォルニア教育報告。（「BOOK」データベースより）		
196	黒い雨	井伏鱒二	新潮社
	一瞬の閃光とともに焦土と化したヒロシマ。不安な日々をおくる閑間重松とその家族…彼らの被爆日記をもとに描かれた悲劇の実相。原爆をとらえ得た世界最初の文学的名作。（「BOOK」データベースより）		
197	恋紅	皆川博子	新潮社
	遊女屋の愛娘ゆうは大勢の花魁や男衆の中で、華やかな郭の裏も表も見て育った。ある日、芝居見物に出かけたゆうは升席にいる男を見て衝撃を受ける。5年前、雑踏で途方にくれていたゆうを救い、優しさで包み込んでくれた旅役者だった。一緒になれるなら滅びてもいい—そう心に刻んだ幼い日の記憶を頼りに、無名の役者に縋りついていく女の情念の世界を描く直木賞受賞作。（「BOOK」データベースより）		
198	心の頂にさらされて	鍋島圭子	頸草出版サービスセンター
	もしかすると、私たちが行き続ける時代は、より人間的な者が傷つくという過酷な社会なのかもしれない。この推論に多少の真実があるとすれば、傷の深さによって人間らしさの程度を計ることさえできるのだろうが、しかし、なにもかもこれからの発展途上にあった彼女は、そんなにまで自分を痛めつけることはなかった。早乙女勝元（「序文」より）		
199	こども・こころ・ことば　子どもの本との二十年	松岡享子	こぐま社
	“ここ数年、子どもたちが本やお話を昔ほど楽しまなくなった”長年子どもと接してきた著者が、その変化の原因を探ります。ことばと心をからめ、子どもの現在を考える本。		

	書　　名	著　　者	発 行 所
200	砂丘が動くように	日野啓三	中央公論社
	海沿いの砂丘のある町にやってきたルポライターの男が、少年に誘われ迷い込んでゆく奇妙な町の夜と昼の光景。超能力を持つ少年と盲目のその姉。女装する美しい若者。夜の闇に異常発生する正体不明の無数の小動物キンチ。刻々に変化して砂防林にも拘らず死滅へと向かう砂丘。現代人の意識の変容を砂丘の物質のイメージに托しつつ未来宇宙への甦りを象徴させる。第22回谷崎潤一郎賞。（「BOOK」データベースより）		
201	細雪　上・中・下	谷崎潤一郎	新潮社
	小説『細雪』は、いまの世の中では殆ど見かけられなくなったと思われる美しい4姉妹の、妖しい息づかい、微妙な相剋、宿命的ともいえる孤独感が、関西独自の風習や、季節の移り変りのなかで見事に描かれている。（「BOOK」データベースより）		
202	子午線の祀り	木下順二	河出書房新社
	『平家物語』を下敷きに、一の谷の合戦で源氏に敗れた平家が壇の浦の決戦で壊滅するまでのドラマと滅びゆく者の運命を壮麗に謳う。（「BOOK」データベースより）		
203	車輪の下	ヘッセ	新潮社
	誇りと喜びにあふれて首都の神学校に入学したハンスがそこで見出したものは、詰めこみ主義の教育と規則ずくめの寄宿舎生活であり、多感で反抗的な友人の放校であった。疲れ果てて父の家に戻った彼は機械工として再び人生を始めようとするが…。重い「車輪の下」にあえなく傷つく少年の魂を描くヘッセ（1877-1962）の永遠の青春小説。（「BOOK」データベースより）		
204	スキャンダル	遠藤周作	新潮社
	キリスト教作家の勝呂は自作の授賞式で、招待客の後ろに醜く卑しい顔をした、自分に酷似した男が立っているのに気が付いた。同じ頃、勝呂が歌舞伎町の覗き部屋や六本木のSMクラブに出入りしている、という醜聞が流れる。この醜聞を執拗に追うルポ・ライターに悩まされながら、もう一人の〈自分〉を探す勝呂が見たのは…。仮面を外したキリスト教作家の心奥を鋭く抉った衝撃の長編。（「BOOK」データベースより）		
205	父の詫び状	向田邦子	文藝春秋
	宴会帰りの父の赤い顔、母に威張り散らす父の高声、朝の食卓で父が広げた新聞…だれの胸の中にもある父のいる懐かしい家庭の息遣いをユーモアを交じえて見事に描き出し、“真打ち”と絶賛されたエッセイの最高傑作。また、生活人の昭和史としても評価が高い。（「BOOK」データベースより）		
206	寺田寅彦随筆集　1	寺田寅彦	岩波書店
	寺田虎彦（1878－1935）の随筆は芸術的感覚と科学精神との稀有な結合から生まれ、それらがみごとな調和をたもっている。しかも主題が人生であれ自然であれ、その語り口からはいつも暖かい人間味がつたわって来る。寅彦を知ること深い小宮豊隆が、20代から最晩年の50代後半まで書きつがれた随筆から珠玉の110余篇を選んでこれを5巻に編んだ。（全5冊）（表紙より）		
207	富嶽百景／走れメロス	太宰治	岩波書店
	太宰治が短篇の名手であることはひろく知られているが、ここに収めた作品は、いずれも様々な題材を、それぞれ素材にふさわしい手法で描いていて、その手腕の確かさを今さらのように思い起こさせる。命を賭した友情と信頼の美しさを力強いタッチで描いた「走れメロス」をはじめ、戦前の作品10篇を集めた。（表紙より）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
208	幻のふるさと	青木修子	青木修子
	ふるさとのことを書いてみたい、と最初に思い立ったのは二十年ほど前で、故郷の森に居た頃、大原先生の『女は生きる』という作品を読んだ時でした。（「あとがき」より）		
209	私の青春日めくり	澤地久枝	講談社
	ふりかえれば迷い傷つき、苦悩した青春の日々、人と歴史とのめぐり逢い、ひたむきに生きて愛を知り、少女は大人に—。敗戦を機に上京した焼け跡だらけの街での生活、初めて仕事を通して知った社会や激しく動く政治の季節のなかで、多感な若き心が揺れる。いま“青春”のあなたに贈る自伝的長編エッセイ。（「BOOK」データベースより）		

1987年購入テキスト一覧

	書　　名	著　　者	発 行 所
210	愛、深き渕より　筆をくわえて終わった生命の記録	星野富弘	立風書房
	言えないもどかしさに耐えられないから絵を描くのかもしれない　うたをうたうのかもしれない。今、もう一度振り返ってみると、深き淵には、澄んだ美しい水が湧き出ていたような気がします。この本は新しい私の出発点です。（「BOOK」データベースより）		
211	アウシュヴィッツで考えたこと	宮田光雄	みすず書房
	ヒロシマとともに、現代史の〈原点〉であるアウシュヴィッツ。そこをたずねた著者が見、考えたことは何か。死と生のはざまからの痛切な人間的訴え。（「BOOK」データベースより）		
212	生きがいについて	神谷美恵子	みすず書房
	「いったい私たちの毎日の生活を生きるかいあるように感じさせているものは何であろうか。ひとたび生きがいをうしなったら、どんなふうにしてまた新しい生きがいを見いだすのだろうか」神谷美恵子はつねに苦しむひと、悲しむひとのそばにあろうとした。本書は、ひとが生きていくことへの深いいとおしみと、たゆみない思索に支えられた、まさに生きた思想の結晶である。1966年の初版以来、多くのひとを慰め力づけてきた永遠の名著。（「BOOK」データベースより）		
213	イギリスと日本　その教育と経済	森嶋通夫	岩波書店
	日本は高度成長を遂げて経済大国になったが、一方、英国はかつての大英帝国から小さな福祉国家へと変貌した。長年、ロンドン大学で理論経済学を講じている著者は、英国の中等・高等教育の実際の姿と、日本の画一的な教育の現状とを対比しながら、教育の社会における在り方を論じ、これからの日本の教育と経済の方途を示す。（「BOOK」データベースより）		
214	海の沈黙、星への歩み	ヴェルコール	岩波書店
	ナチ占領下のフランス国民は、人間の尊さと自由を守るためにレジスタンス運動を起こした。ヴェルコールはこうした抵抗の中から生まれた作家である。ナチとペタン政府の非人間性をあばいたこの二編は抵抗文学の白眉であり、祖国を強制的につつんだ深い沈黙の中であらがいつづけ、解放に生命を賭けたフランス人民を記念する。（「BOOK」データベースより）		
215	おくのほそ道行	森本哲郎	平凡社
	一昨年（1982）の秋、私は写真家・笹川弘三氏から『おくのほそみち』の旅に出ないか、と誘われた。笹川さんの「まねきにあひて」わが胸中にも、まず松島の月がかかり、かくて、いっさいの仕事を放り出し、日取りも「弥生も末の七日」に合わせて陽暦の五月十六日、文庫版『おくのほそ道』をポケットに入れて千住を出発したのであった。（「あとがき」より）。		
216	戒厳令下チリ潜入記　ある映画監督の冒険	G. ガルシア＝マルケス	岩波書店
	ヨーロッパ亡命中のチリ反政府派の映画監督ミゲル・リティンは、一九八五年、変装して戒厳令下の祖国に潜入、『チリに関する全記録』の撮影に成功した。スラム街や大統領府内の模様、武装ゲリラ幹部との地下会見。母や旧友との劇的な再会…。死の危険を遂にくぐりぬけるまでの奇跡の六週間が、ノーベル賞作家によって見事に記録された。（「BOOK」データベースより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
217	花枝を折る	浜田歌	浜田歌
	「人生の節目を迎えた私は、蚕にたとえるなればそろそろ繭を造る年頃となりました。浅学非才の頭の中から節だらけの糸を、あえぎあえぎ繰り出して、書きためたものを傘寿のしるしにと思いまして、つなぎ合わせますとボタ繭のような本になりました」。（「はじめに」より）		
218	崩れ	幸田文	講談社
	山の崩れの愁いと淋しさ、川の荒れの哀しさは捨てようとして捨てられず、いとおしくさえ思いはじめて…老いて一つの種の芽吹いたままに、訊ね歩いた“崩れ”。桜島、有珠山、常願寺川…瑞々しい感性が捉えた荒廃の山河は切なく胸に迫る。自然の崩壊に己の老いを重ね、生あるものの哀しみを見つめた名編。（「BOOK」データベースより）		
219	遠いアメリカ	常磐新平	講談社
	世の中が、ずっと貧しかった頃。クリーネックス・ティシューもまだ日本に入ってきていなかった、そんな時代にひたすらアメリカに焦がれ続けた青年重吉と、演劇に熱中した娘椙枝。愛と希望だけが頼りの、そのふたりのひたむきな生、揺れ動く心の襞を、鮮やかに浮かびあがらせた、直木賞受賞の名品集。（「BOOK」データベースより）		
220	花衣ぬぐやまつわる……わが愛の杉田久女	田辺聖子	集英社
	大正から昭和にかけ、女流俳句の先駆者として俳誌「ホトトギス」で活躍した天才的俳人・杉田久女は、昭和11年、敬慕する師・高浜虚子から突然、同人を除名された。俳句を芸術として取り組み、17文字に生命を賭けていた久女は以来、不幸な運命を辿る…。かずかずの艶麗な句を遺しながらダークな伝説にまみれた悲劇な人・久女。芸術と家庭のはざまで、懸命に生きた“早すぎたノラ”の真実に迫り、新しい久女像を創造する。悲劇の女流俳人を描く書き下し長編。（「BOOK」データベースより）		
221	花の生涯	船橋聖一	新潮社
	三十五万石彦根藩主の子ではあるが、十四番目の末子だった井伊直弼は、わが身を埋木に擬し、住まいも「埋木舎」と称していた。「政治嫌い」を標榜しつつも、一代の才子長野主膳との親交を通して、曇りのない目で時代を見据えていた。しかし、絶世の美女たか女との出会い、それに思いがけず井伊家を継ぎ、幕府の要職に就くや、直弼の運命は急転していった…。（「BOOK」データベースより）		
222	花のマエストロ	上条逸雄　ほか	泰樹社
	庄野の晩年に人々が寄せた真実と愛は私たちの心をうつものがある。花を愛し、民衆のために尽くし、人としての節操を守って無欲に生きたレオナルド・庄野貞雄は若き日に日記にしたためたとうり、人として立派に生きたと思う。情熱の都ブエノス・アイレスから、モンテビデオにくりひろげられる、孤独なボヘミアンの詩的生涯。（「BOOK」データベースより）		
223	堀の中の懲りない面々	安部穣二	文藝春秋
	犯罪のプロフェッショナルばかりを集めた府中刑務所の中で繰りひろげられるふてぶてしくて奇怪な人間群像を活写したベストセラー　（「BOOK」データベースより）		

1988年購入テキスト一覧

	書　　名	著　　者	発 行 所
224	ある歳月	吉田満穂	高知教会婦人部
	吉田牧師が高知にお住まいになられ、土佐人となるためによく学ばれ、努力なさった先生のお人柄に触れ、尊敬と暖かさを感じました。一人でも多くの方に是非読んで頂きたい。永年先生の教えを受けて共に歩まれた方々！よい思い出となり又励ましとなりますように（井上孝子）（「はじめに」より）		
225	一本のバナナから　授業づくりハンドブック　3　社会科	大津和子	国土社
	バナナだけをとっても、フィリピンと日本は密接につながっているのだが、その日の食に苦しむ農園労働者と“安く美味しい”バナナを食べて満足する子どもらとの距離を埋めるのは、いかにむつかしいことか。アジアに足を運んで実地を体験し実感を鍛える教育法。（「BOOK」データベースより）		
226	生命は守られているか	高知新聞社編集局	高知新聞社
	混沌とした世相が、心喪失の時代を告げる。生命の大切さを訴える――。体のハンディを抱え、恵まれない環境の中で懸命に生きようとする人々の姿を長期ルポ！昭和六十一年四月から六十二年七月まで高知新聞紙に掲載。（帯より）		
227	ヴァージニアの蒼い空	林京子	中央公論社
	初孫の誕生、スーパーや魚市場での買物、勇気ある患者と証明書を送ってきた歯科医…。息子夫婦、幼い孫と過ごした、ヴァージニアの街での3年間。（「BOOK」データベースより）		
228	カイワレ族の偏差値日記	村崎蓉子	鎌倉書房
	秀才でも鈍才でもない、「カイワレの背くらべ」程度の息子研史は中学三年生。六月のある日、父母会で研史の偏差値を告げられて驚いた。担任教師はこのままだとどんな高校に入れるかわからないと言う。その日から母子の偏差値との闘いは始まった。日本の教育の現実を描いたベストセラー。（「BOOK」データベースより）		
229	黄色い髪	干刈あがた	朝日新聞社
	「自分が学校から脱落するのではなく、自分から学校にさよならする」と決めた14歳の少女夏実。「ほかの子がちゃんと行ける学校へ、行けないような子に育ててしまった」と自らを責める母の史子。肉親、隣人・教師たちはそれぞれの立場から、この母娘を見守る。無機質なシステムと化した学校をめぐる問題を、現代を生きるすべての人々に関わるものとしてとらえた社会派小説。（「BOOK」データベースより）		
230	始原への旅だち　第2部　恋をするエイラ　上・中・下	ジーン・アウル	評論社
	いま太古の風に吹かれよう…。人類の黎明期を舞台に、ネアンデルタールの部族に拾われたクロマニヨンの少女エイラをめぐり、波乱のドラマが展開。人間の原初の心が満ちた遠大なロマンの世界を描き、世界中から注目を浴びている、衝撃の大河小説！（帯より）		
231	四国　おんな遍路記	西岡寿美子	新人物往来社
	八十八カ所乱れ打ち！女ふたり「お四国」を行く。この千年の歴史を持つ「へんろ道」には歩けば魂に呼びかけてくる何かがある。その何かにひかれて、ただただ見知らぬ浦や山を漂い歩いた。また歩くだろう、と言うほかない。小熊秀雄賞・農民文学賞受賞。（「BOOK」データベースより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
232	同行二人　四国霊場へんろ記	土佐文雄	高知新聞社
	私は以前から四国八十八ヵ所の霊場を遍路となってまわってみたいと思っていた。中世の人々が救いを求めた四国八十八ヵ所が、いまこの私たちを救い得るかどうかはまったく不明である。しかしそこには私の魂を救いうる何かがひそんではすまいか。現代人が忘れ去った何かがかくされていはすまいか。私はそのようなかすかな期待を抱いて、大師の金剛杖に導かれながら、四国遍路に旅立ってみたのである。（「はじめに」より）		
233	凪の光景	佐藤愛子	朝日新聞社
	青春をとり戻したい、と64歳の妻・信子が離婚を申し出た時、信念に生きる72歳の夫・丈太郎は、愚か者め、と呟いた。…新しい時代感覚の大波に揺れる、現代日本の三世代家族の縮図を鮮烈に描く。（「BOOK」データベースより）		
234	ノルウェイの森　上・下	村上春樹	講談社
	暗く重たい雨雲をくぐり抜け、飛行機がハンブルク空港に着陸すると、天井のスピーカーから小さな音でビートルズの『ノルウェイの森』が流れ出した。僕は一九六九年、もうすぐ二十歳になろうとする秋のできごとを思い出し、激しく混乱し、動揺していた。限りない喪失と再生を描き新境地を拓いた長編小説。（「BOOK」データベースより）		
235	バナナと日本人　フィリピン農園と食卓のあいだ	鶴見良行	岩波書店
	スーパーや八百屋の店頭に並ぶバナナの九割を生産するミンダナオ島。その大農園で何が起きているか。かつて王座にあった台湾、南米産に代わる比国産登場の裏で何が進行したのか。安くて甘いバナナも、ひと皮むけば、そこには多国籍企業の暗躍、農園労働者の貧苦、さらに明治以来の日本と東南アジアの歪んだ関係が鮮やかに浮かび上がる。（「BOOK」データベースより）		
236	花の降る午後	宮本輝	角川書店
	夭折したレストラン・オーナーの夫は店に掲げた「白い家」の額の裏に、妻に宛てた驚くべき告白の手紙を隠していた。そしてその絵を貸してくれと作者の高見雅道が訪れてきたとき、新しい恋と、店を乗っ取りから守る妻典子の華やかな闘いが始まった。新しい時代を生きる女のしなやかな生を描く宮本文学の傑作　（「BOOK」データベースより）		
237	独りだけのウィルダーネス	リチャード・ブローンネク	東京創元社
	厳しく美しい大自然の中、たった独りで人間は何ができるだろうか？その場所は、アラスカ山脈の中腹ツイン・レイクスの畔。時は、1968年5月下旬からの16ヶ月間。古ぼけた小さな小屋を振り出しに独りの男がハンドツールだけを頼りに完璧な生活を築き上げた。丸太小屋と野生動物とラスト・フロンティアの日誌。（「BOOK」データベースより）		
238	よく死ぬことはよく生きることだ	千葉敦子	文藝春秋
	あなたは、万一明日という日がなくなっても後悔しない自信がありますか。三度目の癌再発と闘いながら一日一日を全力で生きた著者は、自分の人生をどう生きてきたかがどう死ぬかを決定するのだと言う。講演「死への準備」の全文、日本の医療サービスへの提言など心豊かな最後の日々を送るための心がまえを説く。（「BOOK」データベースより）		

1989年購入テキスト一覧

	書　　名	著　　者	発 行 所
239	愛情物語　インドガンー子育てアルバム	アンゲリカ・ホーファー	竹書房
	誕生の瞬間から羽ばたく日まで、“母親”としての温かい眼差しと動物学者としての細やかな観察で6羽のガンの成長を見つめ続けた感動あふれるフォト・エッセイ。（「BOOK」データベースより）		
240	愛すべき酔っ払いに捧ぐ	森岡雅子	四国写植出版制作室
	「書ききれないほどの思い出をありがとう」世界中で一番軽蔑していたはずの大酒飲みの父親を、いつのまにか世の中で一番尊敬するようになっていました。嫁ぐ日が間近に迫り、もうじきこの酔っ払いと離れることになります。今まで素直にいえなかった感謝の気持ちを、一冊の本に代えて、淋しがり屋の父にプレゼントしたいと思います。（帯より）		
241	生きることの意味を求めて　エティの手紙	エティ・ヒレスム	晶文社
	収容所の考える心になりたい—。ユダヤ人としての過酷な運命にたちむかい、人生への限りない愛をつづる感動の手紙。（帯より）		
242	エビと日本人	村井吉敬	岩波書店
	エビフライ、天ぷらなど、1人平均で年に70匹。世界1のエビ消費国・日本は、その9割を輸入に頼っており、エビはいまや輸入食品の中でも首位の座にある。だが、一体どこでどのように獲られているのか。インドネシアでトロール船に乗り、台湾で養殖の実情を見るなど調査を重ねてきた著者が、日本とアジアとの知られざる関係を語る。（「BOOK」データベースより）		
243	キッチン	吉本ばなな	福武書店
	家族という、確かにあったものが年月の中でひとりひとり減っていって、自分がひとりここにいるのだと、ふと思い出すと目の前にあるものがすべて、うそに見えてくる—。唯一の肉親の祖母を亡くしたみかげが、祖母と仲の良かった雄一とその母(実は父親)の家に同居する。 日々のくらしの中、何気ない二人の優しさにみかげは孤独な心を和ませていくのだが…。世界二十五国で翻訳され、読みつがれる永遠のベスト・セラー小説。泉鏡花文学賞受賞。 （「BOOK」データベースより）		
244	ごく普通の在日韓国人	姜信子	朝日新聞社
	「どんなに意味を抜こうとしても、変に意味が込められてしまう『在日韓国人』よりも、『日本語人』というほうが身も心も軽くなるような気がする」と、在日韓国人3世の著者は言う。日本で生まれ育ち、日本人と結婚、娘をもうけた彼女は、さまざまな障害をどのように乗りこえてきたのか。在日韓国人の悩みと喜びを率直に描きながら、「国籍」「民族」の意味を鋭く問いかけ深く考えさせる書。（「BOOK」データベースより）		
245	国境線上で考える	犬養道子	岩波書店
	多くの異語・異人種・異国人のなかを縦横にかけめぐる国境人として、凄惨きわまる難民たちの問題や「繁栄」をほこる「国際化」日本のあり方を、もっとも実践的で自由な視角から考える。（「BOOK」データベースより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
246	少年	ロアルド・ダール	早川書房
	短篇の名手ダールからの、楽しいエピソードがいっぱい詰まった贈り物をお届けします。自転車を乗りこなそうと夢見た幼い頃、菓子屋で起きた“ネズミ事件”、ノルウェーでの夏休み、姉の恋人にしかけた大胆ないたずら、そして、手ごわい上級生や教師たちと過ごした厳格な寄宿学校での日々…自筆の挿絵や写真をふんだんに盛り込んで、ユーモアとウィットにあふれた筆致で綴る、子供時代が懐かしくなるようなすてきな自伝。（「BOOK」データベースより）		
247	ダイヤモンドダスト	南木佳士	文藝春秋
	火の山を望む高原の病院。そこで看護士の和夫は、様々な過去を背負う人々の死に立ち会ってゆく。病癒えず逝く者と見送る者、双方がほほえみの陰に最期の思いの丈を交わすとき、時間は結晶し、キラキラと輝き出す…。芥川賞受賞作。（「BOOK」データベースより）		
248	寺田寅彦随筆集　２	寺田寅彦	岩波書店
	『寺田寅彦随筆集　１』に同じ。		
249	テルミー　　血よりも信	三宮慎助	土佐出版社
	終戦、朝鮮動乱、安保闘争…、揺れ動く時代の真只中で力強く生きる天才的反戦歌手テルミーと、その周辺の人々を活写した話題の長編小説。（帯より）		
250	プラハ幻景　東欧古都物語	ヴラスター・チハーコヴァー	新宿書房
	錬金術師が、パタフィジシャンが、カフカが生きた街プラハ。古代・中世・現代が交錯する、百塔の都プラハ。プラハッ子の美術評論家がその魅力をあますことなく語る。（「BOOK」データベースより）		
251	われ弱ければ　矢嶋楫子伝	三浦綾子	小学館
	厳しい明治の世、熊本の旧家に生まれた矢嶋かつは、酒乱の夫に再三生命の危機にさらされ、自分から離縁を言い渡す。当時の風潮に反するかつの行いに世間も身内も冷たく、三人の子を置いて単身東京へ行くことに。船旅の途中自らに「楫子」と命名し、強い意志で教師を志す楫子だったが、十歳近くも年下の妻子ある書生との恋愛、出産を経て、人の“弱さ”を痛感する。そして出会ったのがキリスト教だった。（「BOOK」データベースより）		

1990年購入テキスト一覧

	書　　名	著　　者	発 行 所
252	息にわがする	大原富枝	朝日新聞社
	崩岸の上に駒を繋ぎて危ほかと人妻児ろを息に我がする—人妻を恋する若者の切なさ、崩れそうな崖道に馬をつないでいる心地の危うさ、息をとめようとすれば生命を失うほかない、命がけの恋なのだ…苦悩や悲哀、寂しさや切なさの連鎖であった著者の人生の折折のことを綴った珠玉のエッセイ。（「BOOK」データベースより）		
253	異境のアルメニア人	マリグ・オアニアン	明石書房
	再生を求めて…アルメニア人の旅立ち。第1次大戦下のトルコでの迫害を逃れて旅立ったアルメニア人の家族の視点からとらえた現代史の断面。現在、噴出する民族問題の根底にあるものはなにか。（帯より）		
254	花影の花　大石内蔵助の妻	平岩弓枝	新潮社
	元禄十六年二月、大石内蔵助、主税父子は忠臣義士として華やかに散る。その影で、ひっそりと咲きつづけた小さく可憐な花…。大石内蔵助の妻となり、別れて後はその遺児大三郎とともに、終生“忠臣の妻”として生きた女、りく。その哀しみ多い六十八年間の生涯が、ここに鮮やかに描き出される。「忠臣蔵」後の秘められたドラマに光をあてた感動の力作長編。吉川英治文学賞受賞作。（「BOOK」データベースより）		
255	木を植えた人	ジャン・ジオノ	こぐま社
	たった一人で希望の実を植え続け、荒れ地から森を蘇えらせた孤高の人。ひたすら無私に、しかも何の見返りも求めず、荘厳ともいえるこの仕事を成しとげた老農夫、エルゼアール・ブフィエの高潔な魂が、読む人の胸をうつ。（「BOOK」データベースより）		
256	酒屋へ三里豆腐屋へ二里	安岡章太郎	福武書店
	「『酒屋へ三里、豆腐屋へ二里』というのは昔、寄席で落語のまくらに聞いた覚えがある…」グラグラと目のまわる奇病を抱えて、イロハがるたから石田心学へ思いをやり、なつかしくも思いがけぬ訪問となった弘前の小学校、夏の夕べの涼風に似た豆カンの味を描く。そして、半年に及んだ突然の入院生活と予後の日々との想いをユーモアにくるんだ小説的語りで描く連作集。（「BOOK」データベースより）		
257	寂聴　般若心経　生きるとは	瀬戸内寂聴	中央公論社
	仏の教えを266文字に凝縮した「般若心経」の神髄を自らの半生と重ね合せて説き明かし、生きてゆく心の拠り所をやさしく語りかける、最良の仏教入門。（「BOOK」データベースより）		
258	愁月記	三浦哲郎	新潮社
	一家の暗い宿命を負って生きた母が、九十一歳で長かった辛い人生を終えようとしている。その死の前後を静謐な文章で淡々と綴った、母への絶唱「愁月記」他、久しぶりに肉親たちや著者自身に関わる作品ばかりで編んだ待望の短篇集。（「BOOK」データベースより）		
259	珠玉	開高健	文藝春秋
	海の色と、血の色と、月明の色と。3つの宝石に托された3つの物語。同時代を疾駆した作家が、生涯の最後に静謐な受容に到る、悲痛なまでの内なる彷徨。絶筆。（「BOOK」データベースより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
260	水平社宣言を読む	住井すゑ　ほか	解放出版社
	『水平社宣言を読む』――この企画は、赤々と燃える炎に吸い込まれそうになる魅惑の世界であった。住井すゑさんとともに、この仕事に参加した私は、いまあらためて水平者宣言の深淵な心に襟をただしている。それは人を寄せつけない孤高なそびえかたではなく、人間への優しいまなざしをたたえながら、ひたすら人間の尊厳を希求するすがすがしさである。＜福田雅子＞（「あとがき」より）		
261	ソロモンの指環　＜動物行動学入門＞	コンラート・ローレンツ	早川書房
	孵卵器のなかでハイイロガンのヒナが孵った。小さな綿毛のかたまりのような彼女は大きな黒い目で、見守る私を見つめ返した。私がちょっと動いて話しかけたとたん、ガンのヒナも私にあいさつした。こうして彼女の最初のあいさつを「解発」してしまったばかりに、私はこのヒナに母親として認知され、彼女を育てあげるという途方もない義務を背負わされたのだが、それはなんと素晴らしく、愉しい義務だったことか…「刷り込み」理論を提唱し、動物行動学をうちたてた功績でノーベル賞を受賞したローレンツ博士が、溢れんばかりの喜びと共感をもって、研究・観察の対象にして愛すべき友である動物たちの生態を描く、永遠の名作。（「BOOK」データベースより）		
262	地球はふるえる	根本順吉	筑摩書房
	「地球はこれからどうなるのだろう」自分なりに、この本のねらいをいってみるなら、それは地球の気候ないし天候と私とのつきあいの個人的な回想ということになるでしょうか（「あとがき」より）		
263	寺田寅彦随筆集　３	寺田寅彦	岩波書店
	『寺田寅彦随筆集　１』に同じ。		
264	花影の花　大石内蔵助の妻	平岩弓枝	新潮社
	元禄十六年二月、大石内蔵助、主税父子は忠臣義士として華やかに散る。その影で、ひっそりと咲きつづけた小さく可憐な花…。大石内蔵助の妻となり、別れて後はその遺児大三郎とともに、終生“忠臣の妻”として生きた女、りく。その哀しみ多い六十八年間の生涯が、ここに鮮やかに描き出される。「忠臣蔵」後の秘められたドラマに光をあてた感動の力作長編。吉川英治文学賞受賞作。　（「BOOK」データベースより）		
265	文学部唯野教授	筒井康隆	岩波書店
	究極のパロディか、抱腹絶倒のメタフィクションか！印象批評からポスト構造主義まで壮観な文学理論を展開する唯野先生が「大学」と「文学」という2つの制度＝権力と渡り合った、笑と驚愕のスーパー話題騒然小説。（「BOOK」データベースより）		
266	ぼくの町は戦場だった	BBC	平凡社
	戦争が終わってまだ45年。だから君に。戦争が終わってもう45年。でも、君に。あのころ子どもだった世界12の国の12人から君に贈ります。（「BOOK」データーベースより）		
267	メイドイン東南アジア　現代の「女工哀史」	塩沢美代子	岩波書店
	私たちの身の回りには、衣服、スポーツ用品から、カメラ、時計まで東南アジア製のものがかなりあります。これらの品物は、半世紀以上も前の『女工哀史』さながらの条件で、アジアの人びとの手によって作り出されています。著者は、この労働の実態と働く人びとの苦しみや悩みを伝え、やがて働くあなた方に問題をなげかけます。（「BOOK」データベースより）		

1991年購入テキスト一覧

	書　　名	著　　者	発 行 所
268	オーストラリア6000日	杉本良夫	岩波書店
	日本の真南に位置する大陸オーストラリア。多種多様な移民たちがつくり上げるこの多民族・多文化社会の日常は、同じ高度産業社会のアメリカや日本とは異なった断面を見せてくれる。アジアとの結びつきを強めるオーストラリアと、そこに映しだされる観光開発・経済進出をはかる日本の姿を在豪十八年の著者が複眼的に伝える。（「BOOK」データベースより）		
269	随筆　自然と人生	金田一春彦	三省堂
	自然を愛し、旅を楽しみ、人と人とのふれあいを大切にする著者が、講演に、放送に、執筆に、多忙な日をおくるなかで、折りにふれて語る自然と人生。（「BOOK」データベースより）		
270	人生の四季に生きる	日野原重明	岩波書店
	自然界に咲く花のように、私たちの人生にも春・夏・秋・冬の四季が訪れます。思わぬ困難もあるでしょう。しかし、いかに自分らしい花を咲かせられるか、挑戦できる人は幸いです。内科医として多くの患者の生と死に寄り添った著者が、人生の四季における、生の喜び、仕事と幸福、病い、老い、そして死について語ります。（「BOOK」データベースより）		
271	青春デンデケデケデケ	芦原すなお	河出書房新社
	１９６５年、３月２８日。高校進学をひかえた１５歳の春休み。ラジオから流れてきたベンチャーズの「Pipeline」。その電気ギターのトレモロ・グリッサンド奏法のフレーズに、“ちっくん”は、昼下がりのうたた寝から目覚め、ロックに目覚めた。「やーっぱりロックでなけらいかん！」四国の田舎町の高校生たちがくりひろげる抱腹絶倒、ロックと友情と、あわい恋の物語。（「BOOK」データベースより）		
272	青年茂吉	北杜夫	岩波書店
	どくとるマンボウ北杜夫が描く等身大の父親像。短歌史上に屹立する斎藤茂吉の初期の作品を読みときながら、人間茂吉の知られざる生を愛憎おりなして描く。肉親しか知りえない数々の逸話を紹介し、茂吉の歌の魅力とその背後にみなぎるエネルギーを伝える。マンボウ先生ならではのウイットとユーモアにとむ文章は読者を魅了してやまない。（「BOOK」データベースより）		
273	そんな　バカな！	竹内久美子	文藝春秋
	嫁と姑はなぜ憎み合わねばならないのか？魅力的で性格もいい男がどうして浮気だけはおさまらないのか？そもそも賢いはずの人間がときとしてアホなことをしでかすのはなぜなのか？この深遠なる人間行動の謎に「利己的遺伝子」という考え方から迫る“天才”竹内久美子の最高傑作。（「BOOK」データベースより）		
274	父への手紙	窪島誠一郎	筑摩書房
	貧しいけれど平和な家庭。やさしい両親―。しかし、どこかに違和感がある。あるとき、ふとしたことから、自分は両親の本当の子供ではないのでは？との疑いがよぎる。成長するにつれて、疑いはますます深まり、ついに確証をつかむ。北へ西へ、父さがしの日々年々が続き、旅の果て行きついた真実は…。作家水上勉氏の実子として話題をよんだ著者の、驚くべき日々の記録。（帯より）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
275	寺田寅彦随筆集　4	寺田寅彦	岩波書店
	『寺田寅彦随筆集　1』に同じ。		
276	鼠　鈴木商店焼打ち事件	城山三郎	文藝春秋
	大正成金から、遂に三井・三菱とならぶ大商社となり、日本財界を彩った鈴木商店の盛衰と、その番頭金子直吉の生涯を描くビジネスマン必読の異色経済小説。（「BOOK」データベースより）		
277	六千人の命のビザ	杉原幸子	朝日ソノラマ
	本書は、世界のユダヤ人社会で高く評価されている杉原千畝領事の博愛主義による歴史的記録です。（「BOOK」データベースより）		

1992年購入テキスト一覧

	書　　名	著　　者	発 行 所
278	受け月	伊集院静	文藝春秋
	永年率いた社会人野球の名門チームからの引退を、自ら育てた後輩に告げられた老監督、亡くなった夫の好きだった野球を始めた息子がベンチで試合を見つめる姿に複雑な思いを抱く若い母親、母と自分を捨てて家を出た父親との再会を躊躇う男…。誰にも訪れる切ない瞬間によぎる思いを描いた、直木賞受賞作。（「BOOK」データベースより）		
279	英国史のティータイム	森護	大修館書店
	歴史の表街道から離れた話題でありながら、興味津々、無視するに忍びないものの、正史の盲点を突くものなど、23の項目に分けて紹介。ふつうの歴史書では読めない話。（「BOOK」データベースより）		
280	風を聴く木	大原富枝	中央公論社
	愛が、孤独が、世界が、もうわたしの心の傷口を洗うことはありません。わたしはいま、風ばかり聴いています。（「BOOK」データベースより）		
281	自分のための童話	松本睦	四国写植出版制作室
	昨年の春から、学校の合間を見て、ぼつぼつ書き始めた。気の向く儘に書いていくと、思いは過去へ過去へと逆行し、「老いたる女の昔語り」となり、四十年間、特に後半、とかくむつかしい松本先生であった私の、「やわ」な部分が丸見えになってきた。（「あとがき」より）		
282	従軍慰安婦・内鮮結婚	鈴木裕子	未来社
	従軍慰安婦問題が私たちにつきつけてくるものは何か。その戦後責任はどうあるべきか。近代女性史上、見落とせない性の侵略の歴史を事実に沿ってたどり、女の人権問題の原点に迫る。（「BOOK」データベースより）		
283	清貧の思想	中野孝次	草思社
	名利に使はれて、閑かなる暇なく、一生を苦しむるこそ、愚かなれ…。モノとカネにふりまわされ、明け暮れする人生は真に幸福なのか？光悦、西行、兼好、良寛ら先人の生き方の中に、モノを「放下」し、風雅に心を遊ばせ、内面の価値を尊ぶ「清貧」の文化伝統を見出し、バブル謳歌の日本に猛省を促した話題のベストセラー。（「BOOK」データベースより）		
284	寺田寅彦随筆集　５	寺田寅彦	岩波書店
	『寺田寅彦随筆集　１』に同じ。		
285	私を抱いてそしてキスして	家田荘子	文藝春秋
	エイズ患者の実態を知るために、アメリカでホーム・ナース・ボランティアの資格を取得した著者。やがてエイズ患者である一人の黒人女性と友情を育んでいく。周囲の偏見・差別、そして自らの心に潜む病への恐れを乗り越えて、芽生えた友情を描く感動のルポ。（「BOOK」データベースより）		

1993年購入テキスト一覧

	書　　名	著　　者	発 行 所
286	イギリスはおいしい	林望	平凡社
	イギリスの食事がまずいことは、世界の定評だ。だが、実はこの国にはおいしいものがたくさんある。「鯖の燻製」「ホワイトベイトの唐揚げ」「お菓子のスコン」、そしてリンゴ界の逸物コックスも。イギリスの食卓には、私たちがとうの昔に捨て去ってしまった「おいしさ」が、そして「あじわい」が生きているのだ。イギリス生活の楽しさの中に、イギリス料理の「おいしさの秘密」を描き出し、日本にイギリス・ブームをもたらしたベストセラー。（「BOOK」データベースより）		
287	我不知道の彼方に	川野和子	高知新聞社
	［我不知道（私は知らない）］まだまだ終わりのない戦後の痛恨の影―。中国に残留した日本人達との面会を求めて現地を訪れた著者は、その旅で何を感じ、何を考えたか！（帯より）		
288	生まれたのは何のために	松本信	教文館
	17歳で“らい”の宣告を受け、死のうとした時「おれは何のために生まれてきたのか」との疑問が湧いた。以来56年間、隔離されながら、この問いを問いつづけた。ドストエフスキーによって聖書に出会い、洗礼を受け、教会に失望し、失恋し、結婚し、妻と死別し、回心し、失明し、再び回心し、自治会活動に、人権獲得に立ち上った…。（「BOOK」データベースより）		
289	おれたちは親子	大原健士郎	朝日新聞社
	人間関係が複雑にからみ合う現代では、日常生活の中で親と子、夫と妻の間でさえも断絶や感情のもつれなどから多くの悩みがあり、精神科医に“こころ”の内の悩みを訴えに訪れる。診察室に救いを求めてくる老若男女の患者の話を聞き、心の奥の問題を分析し、また著者自身と家族の日常の関わりを通して、これからの親子、夫婦のありようを温かく静かに語る。（「BOOK」データベースより）		
290	女ざかり	丸谷才一	文藝春秋
	美しい女主人公・南弓子は、大新聞の論説委員。書いたコラムがもとで政府から圧力がかかり、論説委員を追われそうになる。弓子は、恋人の大学教授、友人、家族を総動員して反撃に出るが、はたして功を奏するか。大新聞と政府と女性論説委員の攻防をつぶさに描き、騒然たる話題を呼んだベストセラー。（「BOOK」データベースより）		
291	白い屋形船／ブロンズの首	上林暁	講談社
	脳溢血で、右半身、下半身不随、言語障害に遭いながら、不撓不屈の文学への執念で歩んだ私小説の大道。読売文学賞「白い屋形船」川端賞「ブロンズの首」ほか、懐しく優しい、肉親・知友そして“ふるさと”の風景。故郷の四万十川のように、人知らずとも、汚れず流れる、文学への愛が、それのみが創造した美事な“清流”。（「BOOK」データベースより）		
292	田宮虎彦集　新潮日本文学36		新潮社
	氏の描き出す主人公の身のおき場所が、常に薄暗く、降ってはやみ、やんではまた降る梅雨空にも似たうっとうしさに閉ざされているのも、「一つの暗黒」を見てしまった筆者の、もはや修正のしようもない呼吸であろう。（進藤純孝・解説より）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
293	父・寺田寅彦	寺田東一　ほか	くもん出版
	先見性に富んだ多彩な異能人、寺田寅彦。母を亡くした子が受けの父の鍾愛。五人の子どもたちが描く父、寅彦の美しい映像。（「BOOK」データベースより）		
294	父・中野好夫のこと	中野利子	岩波書店
	父について知ることのあまりに少なかったとする著者によるユニークな父の記。著名な父を持った娘の激しい葛藤から理解による融和までがさまざまにきめ細かに描かれる。また思いがけぬ父の発見がこの骨太い知識人の人となりと心の奥行きをおのずと明かしてゆく。（「BOOK」データベースより）		
295	佃島ふたり書房	出久根達郎	講談社
	佃の渡しが消えた東京五輪の年、男は佃島の古書店「ふたり書房」を立ち去った—大逆事件の明治末から高度成長で大変貌をとげる昭和39年まで移ろいゆく東京の下町を背景に庶民の哀歓を描く感動長篇。生年月日がまったく同じ二人の少年が奉公先で知り合い、男の友情を育んでいく。（「BOOK」データベースより）		
296	母なる自然のおっぱい	池沢夏樹	新潮社
	知恵を伝達し、流布し、蓄積することに成功してホモ・サピエンスは自然から遊離してしまった。そこには奢りと淋しさが同居している—。その透徹した視座より、捕鯨反対運動、沙漠に造られたエコロジー実験施設、旅、冒険、風景などについて明晰な論理を紡ぐ。凡庸な自然讃歌でも感情的な環境保護思想でもない、極めて知的で創造的な自然と人間に関する12の論考。（「BOOK」データベースより）		
297	母よ・そして我が子らへ	田内基	こころの家族
	半世紀前、韓国人男性と結婚し、木浦で孤児院・共生園を経営。日本と韓国、戦争と内乱の間に翻弄されながら、3000人もの孤児を育てた田内千鶴子。凄まじくも清烈の生涯。（「BOOK」データーベースより）		
298	深い河	遠藤周作	講談社
	人生の岐路で死を見た人々が、過去の重荷を心の奥にかかえながら、深い河のほとりに立ち何を思うのか。神の愛と人生の神秘を問う、著者渾身の感動的作品。（「BOOK」データベースより）		

1994年購入テキスト一覧

	書　　名	著　　者	発 行 所
299	アメリカひじき／火垂るの墓	野坂昭如	新潮社
	昭和20年9月21日、神戸・三宮駅構内で浮浪児の清太が死んだ。虱だらけの腹巻きの中にあったドロップの缶。その缶を駅員が暗がりに投げると、栄養失調で死んだ四歳の妹、節子の白い骨がころげ、蛍があわただしくとびかった—浮浪児兄妹の餓死までを独自の文体で印象深く描いた『火垂るの墓』、そして『アメリカひじき』の直木賞受賞の二作をはじめ、著者の作家的原点を示す6編。（「BOOK」データベースより）		
300	イギリスのある女中の生涯	シルヴィア・マーロウ	草思社
	女中ウィニフレッドは偉大だった。この本は、今世紀初頭の南イングランドで牛飼いの娘として育ち、少女の頃から女中奉公に出て厳しい時代を懸命に生き抜いたある女性の回想記です。ここには、当時のイギリス庶民の暮らし、女中の仕事の辛さ、階級社会の厳しさなどが、あたたかな語り口で克明に綴られています。（「BOOK」データベースより）		
301	エチオピアで井戸を掘る	諸石和生	草思社
	旱魃と飢餓の中、青年海外協力隊員は、わが外交官に見下されながら、それでも井戸を掘り続けた。日本の外交や海外援助のありかたに徹底的な見直しをせまる、元隊員の渾身の手記。（「BOOK」データベースより）		
302	木	幸田文	新潮社
	「樹木に逢い、樹木から感動をもらいたいと願って」北は北海道、南は屋久島まで、歴訪した木々との交流の記。木の運命、木の生命に限りない思いを馳せる著者の眼は、木を激しく見つめ、その本質のなかに人間の業、生死の究極のかたちまでを見る。倒木の上に新芽が育つえぞ松の更新、父とともに無言で魅入った藤、全十五篇が鍛え抜かれた日本語で綴られる。生命の根源に迫るエッセイ。（「BOOK」データベースより）		
303	小石川の家	青木玉	講談社
	祖父　幸田露伴、母　文との日々。昭和13年幸田文は離婚し、娘の玉を連れ青々と椋（むく）の枝がはる露伴の小石川の家に戻った。万事に愚かさを嫌う祖父の小言の嵐は9つの孫にも容赦なかった。祖父の手前蹴とばしても書初めを教える母。「2度はご免蒙りたい」10年の歳月をクールにユーモラスに綴り、晩年の露伴、文の姿を懐かしく匂い立たせる。（「BOOK」データーベースより）		
304	個人的な体験	大江健三郎	新潮社
	異常をもって生まれたわが子を抱える青年の魂の遍歴、絶望と背徳の日々—。（「BOOK」データベースより）		
305	天狗争乱	吉村昭	朝日新聞社
	「桜田門外ノ変」から4年。開国か攘夷かで騒然としていた幕末に、徳川御三家・水戸藩の尊王攘夷派有志が筑波山で挙兵した。幕府と鋭く対峙しつつ、決然と戦い、京都を目指した天狗勢。その凛然とした軌跡を克明に記し、非業の最期を劇的に甦らせた、歴史小説の白眉。（「BOOK」データベースより）		
306	ホームレスになった	金子雅臣	築地書館
	社会現象としてよりも、ふつうのサラリーマンからホームレスになってゆく人たちひとりひとりの心情をさぐりながら浮き彫りにする、東京ホームレスの生活と意見。（「BOOK」データベースより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
307	マディソン郡の橋	ロバート・ジェームズ・ウォラー	文藝春秋
	アイオワの小さな村を訪れた写真家と人妻の運命の四日間――じわじわと感動の輪を広げ、ついには一大ブームになった古典的愛の名作.。（「BOOK」データベースより）		
308	ミラノ霧の風景	須賀敦子	白水社
	記憶の中のミラノには、いまもあの霧が静かに流れている―。ミラノをはじめ、各地で出会った多くの人々を通して、イタリアで暮した遠い日々を追想し、人、町、文学とのふれあいと、言葉にならぬため息をつづる追憶のエッセイ。（「BOOK」データベースより）		
309	モッキンポット師の後始末	井上ひさし	講談社
	食うために突飛なアイディアをひねり出しては珍バイトを始めるが、必ず一騒動起すカトリック。学生寮の“不良”学生3人組。いつもその尻ぬぐいをさせられ、苦りきる指導神父モッキンポット師――ドジで間抜けな人間に愛着する著者が、お人好し神父と悪ヂエ学生の行状を軽快に描く。笑いとユーモア溢れる快作。（「BOOK」データベースより）		
310	夕陽の河岸	安岡章太郎	新潮社
	「伯父の墓地」（第１８回川端康成文学賞受賞）他、死と生のあわいにたたずみ、人生の《黄昏》の景観を濃淡あざやかな筆致で描きあげ、透徹の境地を伝える珠玉の１０篇。（「BOOK」データベースより）		
311	留学生小泉信三の手紙	小泉タエ	文藝春秋
	第一次大戦下のヨーロッパから、若き日の小泉信三が親族に書き送った未発表の手紙と絵葉書８０通。（「BOOK」データベースより）		

1995年購入テキスト一覧

	書　　名	著　　者	発 行 所
312	悪童日記	アゴタ・クリストフ	早川書房 （244p）
	双子の天才少年がみた非情の現実、戦火のなかで彼らはしたたかに生き抜いた。女性亡命作家、衝撃のデビュー作。東欧からの新しい風。（「BOOK」データベースより）		
313	美しき日本の残像	アレックス・カー	新潮社 （264p）
	四国の平家の落人の里に民家を買って城と称し、日頃は京都・亀岡の天満宮の庵に暮す。書画骨董、歌舞伎、古都を愛する一風かわったアメリカ人の日本美見聞録。（「BOOK」データベースより）		
314	女文士	林真理子	新潮社 （308p）
	男との愛を、作家としての名声を、執拗に求め続けた女流作家・真杉静枝の狂おしく哀しい人生を描ききった傑作。（「BOOK」データベースより）		
315	恢復する家族	大江健三郎	講談社 （199p）
	光さんと共に生きる。障害を持つ子供の苦しみを積極的に受けとめ、共に生きていくことによって家族もまた癒されていく。三歳のときすでにベートーヴェンやショパンに敏感に反応し、野鳥の声に示した興味に添うかたちで音楽に出会った光さんを父のやさしい文と母のあたたかい画で綴った感動の長篇エッセイ。（「BOOK」データベースより）		
316	きけわだつみのこえ	日本戦没学生記念会	岩波書店 （395p）
	戦争の惨禍がいまだ人々の記憶になまなましい昭和24年に刊行されて以来、本書は無数の読者の心をとらえ続けてきた。酷薄な状況のなかで、最後まで鋭敏な魂と明晰な知性を失うまいと努め、戦争の目的を疑いつつも、祖国と愛するものの未来を憂いながら死んでいった学徒兵たち。その手記は今日なお我々の胸を打たずにはおかない。（表紙より）		
317	犠牲	柳田邦男	文藝春秋 （253p）
	「脳が死んでも体で話しかけてくる」。自ら命を絶った二十五歳の息子の脳死から腎提供に至る最後の十一日を克明に綴った感動の手記。（「BOOK」データベースより）		
318	草の花	福永武彦	新潮社 （257p）
	『草の花』は、日本文学では稀な、知的な青年を描いた作品である。この青年の孤独は、理知からきているともいえる。理智が彼を潔癖にし、潔癖が妥協を許さない。そのために彼は友を失い、恋人を失ってしまう。＜木多顕彰＞ （「解説」より）		
319	蔵　上・下	宮尾登美子	毎日新聞社（357,329p）
	失明という運命と闘い、ひたむきに、華麗に、愛と情熱をつらぬいた女、烈。雪ふかき新潟の酒造家を舞台に、生きる哀しみと喜びを全身全霊で描きつくした宮尾文学畢生の傑作。（「BOOK」データベースより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
320	これを食べなきゃ	渡辺淳一	集英社 （235p）
	今はなき母の作るイクラ漬。艶めいた絶世の美女のごとく品のよい松葉ガニ。少し失意のときに似合う焼きツブ。少年時代を思い出すトウキビの香り—。北海道に生まれ、豊饒なる大地と海の、旬の味を噛みしめて育った著者が、食べ物へのこだわりと、深い愛着をこめて語る食の自分史、美味なるエッセイ。“食べる”ということは、素材を、季節を、人生を味わうこと。（「BOOK」データベースより）		
321	西行花伝	辻邦生	新潮社 （525p）
	花も鳥も風も月も—森羅万象が、お慕いしてやまぬ女院のお姿。なればこそ北面の勤めも捨て、浮島の俗世を出離した。笑む花を、歌う鳥を、物ぐるおしさもろともに、ひしと心に抱かんがために…。高貴なる世界に吹きかよう乱気流のさなか、権能・武力の現実とせめぎ合う“美”に身を置き通した行動の歌人。流麗雄偉なその生涯を、多彩な音色で唱いあげる交響絵巻。（「BOOK」データベースより）		
322	白洲正子自伝	白洲正子	新潮社 （277p）
	祖父・樺山資紀の思い出から、昭和天皇も遊びに来た富士の別荘のこと、幼い頃から夢中になった能や歌舞伎の名舞台、十四歳でのアメリカ留学、白洲次郎との結婚とヨーロッパへの新婚旅行、小林秀雄や河上徹太郎との交流…興味つきないエピソードの連続でぐいぐい読ませる、“韋駄天お正”待望の自伝。（「BOOK」データベースより）		
323	しろばんば	井上靖	新潮社 （583p）
	父母とはなれて、血のつながりのないおぬいばあさんと二人、伊豆の湯ヶ島でくらす少年洪作。自由な生活の中で、人の世のよろこびや悲しみをまるごと吸収し、人間や社会を見る目を広げていく。（「BOOK」データベースより）		
324	二十年目のインドネシア	倉沢愛子	草思社 （277p）
	今日本は、インドネシア、そしてアジアとますます強く関わりあおうとしている。しかし、そこには数々の難しい問題がよこたわっているのだが、この本には問題の所在とその解決方法を知るための多くのヒントがちりばめられているのである。また、日本の将来に不安を抱かせるような大使館や外務省の時代遅れの体質が、そこで仕事をした者の目を通して鋭く指摘されていることも、この本の重要なポイントとなっている。（「BOOK」データベースより）		
325	人は成熟するにつれて若くなる	ヘルマン・ヘッセ	草思社 （944p）
	いかにして人は良く「老い」ることができるか。人生の後半期のみがもつ素晴らしさ、楽しさを文豪ヘッセが絶妙に綴る。「老い」と「死」をめぐる珠玉のエッセイと詩。（「BOOK」データベースより）		
326	星の来る日々	松本睦	飛鳥出版社 （270p）
	言葉。町並み。風土までが郷愁を誘う。『自分のための童話』を著してから二年。先人への鎮魂もこめての第二作目。（帯より）		
327	老親を棄てられますか	門野晴子	主婦の友社 （246p）
	人はひとりでは生きられない。殺したいほど憎み、離婚の原因ともなった舅が、嫁を追いかけてきて住みついてしまった。なんと言っても帰らない。さあ、ふたりの対決はどうなる。聞きたくない、知りたくない、でも、のがれられない—。これは明日のあなたの物語です。（「BOOK」データベースより）		

1996年購入テキスト一覧

	書　　名	著　　者	発 行 所
328	征きて還りし兵の記憶	高杉一郎	岩波書店
	あの本は偉大な政治家スターリンをけがすものだ。こんどだけは見のがしてやるが—最初の著書『極光のかげに』を日本共産党最高幹部から罵倒されたシベリア抑留帰りの著者は、孤独な長く暗い戦後を歩みはじめた。ソ連とは、社会主義とは、スターリンとは何だったのか。戦後史を画する人びとと事件の交錯をえがく誠実なヒューマニストの痛恨の回想。（「BOOK」データベースより）		
329	柿の種	寺田寅彦	岩波書店
	日常の中の不思議を研究した物理学者で随筆の名手としても知られる寺田寅彦の短文集。「なるべく心の忙しくない、ゆっくりした余裕のある時に、一節ずつ間をおいて読んでもらいたい」という願いのこめられた、味わいの深い一七六篇。（「BOOK」データベースより）		
330	黄落	佐江衆一	新潮社
	還暦間近の夫婦に、92歳の父と87歳の母を介護する日がやってきた。母の介護は息子夫婦の苛立ちを募らせ、夫は妻に離婚を申し出るが、それは夫婦間の溝を深めるだけだった。やがて母は痴呆を発症し、父に対して殺意に近い攻撃性を見せつつも、絶食により自ら命を絶つ。そして、夫婦には父の介護が残された…。老親介護の実態を抉り出した、壮絶ながらも静謐な佐江文学の結実点。（「BOOK」データベースより）		
331	蝉しぐれ	藤沢周平	文藝春秋
	清流と木立にかこまれた城下組屋敷。淡い恋、友情、そして忍苦。苛烈な運命に翻弄されつつ成長してゆく少年藩士をえがく傑作長篇。（「BOOK」データベースより）		
332	その年の冬	立原正秋	講談社
	京都の茶道家元の妻・直子と、中世芸能史家で劇作家の深津荒太。その運命的な出会いを飾ったのは、清楚な冬の花・水仙の花束だった。箱根湯本の雑木林の中で始まる2人の純粋な愛の日々。真の大人の愛を主題に、死の気配を身近に感じつつ完成に心血を注ぎ、ついに絶筆となった、立原文学最後の華麗な世界。（「BOOK」データベースより）		
333	大切なものは目にみえない	宮田光雄	岩波書店
	『星の王子さま』って誰なんでしょう。もしかしたら《生命そのもの》かもしれません。計算できるものだけに執着している現代人にたいして、王子さまとの出会いは、人間として生きる喜びと意味を与えてくれるでしょう。（「BOOK」データベースより）		
334	沈黙	遠藤周作	新潮社
	島原の乱が鎮圧されて間もないころ、キリシタン禁制の厳しい日本に潜入したポルトガル人司祭ロドリゴは、日本人信徒たちに加えられる残忍な拷問と悲惨な殉教のうめき声に接して苦悩し、ついに背教の淵に立たされる…。神の存在、背教の心理、西洋と日本の思想的断絶など、キリスト信仰の根源的な問題を衝き、〈神の沈黙〉という永遠の主題に切実な問いを投げかける長編。（新潮社ホームページより）		
335	脳内革命	春山茂雄	サンマーク出版
	本書はプラス発想こそが心身にとっ最高の薬になることを、医学的・科学的に明らかにした画期的な書。「BOOK」データベースより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
336	バーバラが歌っている	落合恵子	朝日新聞社
	バーバラは自分のやり方で、気持よさそうに歌っている、“語らぬ愛”を。あなたはあの歌を歌っていますか？あなたはあなたの愛を愛していますか？女であることの傷をどう癒し自分を生きたか、女三代にわたる人生と葛藤に、離婚の危機にある家族を絡ませて、家族とは何か、その行方を問う半自伝的問題作。（「BOOK」データベースより）		
337	日の名残り	カズオ・イシグロ	中央公論社
338	品格ある執事の道を追求し続けてきたスティーブンスは、短い旅に出た。美しい田園風景の道すがら様々な思い出がよぎる。長年仕えたダーリントン卿への敬慕、執事の鑑だった亡父、女中頭への淡い想い、二つの大戦の間に邸内で催された重要な外交会議の数々—過ぎ去りし思い出は、輝きを増して胸のなかで生き続ける。失われつつある伝統的な英国を描いて世界中で大きな感動を呼んだ英国最高の文学賞、ブッカー賞受賞作。（「BOOK」データベースより）		
339	フルハウス	柳美里	文藝春秋
	柳発里の『フルハウス』は、、書きかたは粗々しい。しかし力があった。父、母、そして子供の姉、妹が、早くから別々に住む家族崩壊の光景がある。いったいそれは何か、なぜなのか、というのが、真剣なテーマである。他方、作者は、物語をおもしろくするために、姉妹の万引き、妹のポルノ映画出演、ホームレス家族の侵入など、今日的風俗の断片を導入した。水と油のこの二つを強引に攪拌したところに、作者の腕力があった。＜秋山駿＞ （野間文芸新人賞受賞・選評より）		
340	ぼくはこんな本を読んできた	立花隆	文藝春秋
	「同テーマの類書を読め」「自分の水準に合わぬ本は途中でも止めろ」「？と思ったらオリジナル・データにあたれ」…、実戦的読書のためのアドバイスから、書斎・書庫をめぐるあれこれ、そして驚異的な読書遍歴を物語る少年時代の作文まで。旺盛な取材、執筆活動の舞台裏と「知の世界」構築のためのノウ・ハウを全公開する。（「BOOK」データベースより）		
341	星の王子さま	サン=テグジュベリ	岩波書店
	サハラ砂漠に不時着した孤独な飛行士と、「ほんとうのこと」しか知りたがらない純粋な星の王子さまとのふれあいを描いた永遠の名作。（「BOOK」データベースより）		
342	三つの祖国	上坂冬子	中央公論社
	日本人の両親のもとにアメリカで生まれ、奉天市長一家の嫁として満州国に嫁いだものの、太平洋戦争終結直後の混乱のなか、断腸の思いで一人娘と別れ中国を脱出…。いまはアメリカで池坊華道教授として生きるユキコ・ルシール・デービスが、娘との二十八年ぶりの再開を果たすまでの波瀾に満ちた半生を、現地取材を基に克明に描き出す、昭和史ノンフィクション。（「BOOK」データベースより）		
343	山姥	坂東眞砂子	新潮社
	明治末期、文明開化の波も遠い越後の山里。小正月と山神への奉納芝居の準備で活気づく村に、芝居指南のため、東京から旅芸人が招かれる。不毛の肉体を持て余す美貌の役者・涼之助と、雪に閉ざされた村の暮らしに倦いている地主の家の嫁・てる。二人の密通が序曲となり、悲劇の幕が開いた—人間の業が生みだす壮絶な運命を未曾有の濃密さで描き、伝奇小説の枠を破った直木賞受賞作。（「BOOK」データベースより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
344	海の忍者はだまされやすい	中内光昭	南の風社
	高知大学元学長であり、ホヤの研究者でもある著者が、生物学の視点でユーモアも混じえて語る科学エッセイ。生物学の面白さを垣間見せながら、人間の生き方や社会のあり方について、広い視野で、何気なく語られている。（南の風社HPより）		
345	女盗賊プラーン　上・下	デヴィ・プーラン	草思社
	インドの極貧の村に低カーストとして生まれ、わずか11歳で結婚させられた少女プーラン。虐待の末に婚家を追い出された彼女を待ち受けていたのは、村八分、白昼のレイプ、犬以下の扱い。ある日盗賊団に誘拐され…。（TRC MARCより）		
346	海峡の光	辻仁成	新潮社
	少年刑務所で看守として働く「私」の前に現れた一人の受刑者。彼は子供のころ「私」を標的にして執拗に繰り返されたいじめの煽動者だった。人間の悪の根源に迫り、「ここに文学がある」と絶賛された97年上半期芥川賞受賞作。（「BOOK」データベースより）		
347	鎌倉のおばさん	村松友視	新潮社
	その女が、「私」の祖父・村松梢風と暮す鎌倉の家には、独特の空気があった。放蕩三昧の梢風を「文士」に仕立てあげながら、その女は年齢や経歴を様々に偽り、虚構の人生を縦横に紡ぎだしていたのだから。その姿はいつしか、実母は死んだと言い聞かされ、梢風の正妻である祖母と二人きりで育った「私」自身の複雑な生い立ちと、どこかで微妙に交錯し始めた…。泉鏡花文学賞受賞。（「BOOK」データベースより）		
348	月光のさざ波	立松和平	文藝春秋
	鳥獣虫魚も草木も人も海といっしょに呼吸する—。そんな世界に激しく生きる北の漁師の物語。（「BOOK」データベースより）		
349	少年H　上・下	妹尾河童	講談社
	胸に「H.SENO」の文字を編み込んだセーター。外国人の多い神戸の街でも、昭和十二年頃にそんなセーターを着ている人はいなかった…。洋服屋の父親とクリスチャンの母親に育てられた、好奇心と正義感が人一倍旺盛な「少年H」こと妹尾肇が巻き起こす、愛と笑いと勇気の物語。毎日出版文化賞特別賞受賞作。（「BOOK」データベースより）		
350	他人をほめる人けなす人	フランチェスコ・アルベローニ	草思社
	会社で、家庭で、身近にいる不可解な人々の深層を探る。陰口をたたく人、おべっかを使う人、他人を認めない人、困惑させる人…。人間理解を深め、生きる指針を与えてくれるエッセイ。（「BOOK」データベースより）		
351	智恵子飛ぶ	津村節子	講談社
	天才芸術家である高村光太郎の陰で、その秘められた才能を花咲かすことの出来なかった妻・智恵子。天真爛漫な少女時代、平塚らいてうらと親交を深める青春時代、光太郎との運命の出逢い、そして結婚、発病—。一心に生きた知恵子の愛と悲しみを余すことなく描いた、芸術選奨文部大臣賞受賞の傑作長編。（「BOOK」データベースより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
352	沈黙の春　生と死の妙薬	レイチェル・カーソン	新潮社
	いまなお鋭く告発しつづけ、21世紀へと読み継がれた古典。（「BOOK」データベースより）		
353	天涯の花	宮尾登美子	集英社
	あたりを払って誇り高く咲くキレンゲショウマ。「私はこの花に会うため、お山さんに来たのではないか」珠子は心打たれた。吉野川沿いの養護施設で育った珠子は、十五歳で霊峰・剣山にある神社の神官の養女となる。清澄な自然を背景に、無垢な魂を持ち続ける少女の成長と恋を描き、新鮮な感動を呼ぶ長編。（「BOOK」データベースより）		
354	ボスニアで起きたこと	伊藤芳明	岩波書店
	280万人の難民、1万2000人の行方不明者、300万個の地雷。いったいどうすれば、そこに住んでいる民族を追い出すことができるのか。消された町コザラツに長期滞在して「民族浄化」の真相に迫る。悲劇は終っていない。（「BOOK」データベースより）		
355	鉄道員（ぽっぽや）	浅田次郎	集英社
	娘を亡くした日も、妻を亡くした日も、男は駅に立ち続けた―。心を揺さぶる“やさしい奇蹟”の物語。（「BOOK」データベースより）		
356	うるわしき日々	小島信夫	読売新聞社
	人生の苦悩と愛―『抱擁家族』から30年、老いた小説家が、難病で記憶を失くした息子の中によみがえらせた思いとは…。紆余曲折の日々を淡々とみつめた珠玉の長編小説。（「BOOK」データベースより）		
357	ダロウェイ婦人	ヴァージニア・ウルフ	集英社
	１９２３年、６月のある水曜日。第一次世界大戦の影響が残るロンドンでクラリッサ・ダロウェイは、自宅で開くパーティのため、花を買いに街に出る。瑞々しい生命力に溢れるロンドンを歩きながら、ダロウェイ夫人の意識は青春時代と現在を自在に行き来し、心に無数に降りそそぐ印象を記す。あらゆる過去の一日が充満した一日を「意識の流れ」の手法で、生、死、「時」を描いたモダニズム小説の代表作。（「BOOK」データベースより）		
358	血と骨	梁石日	幻冬舎
	一九三〇年頃、大阪の蒲鉾工場で働く金俊平は、その巨漢と凶暴さで極道からも恐れられていた。女郎の八重を身請けした金俊平は彼女に逃げられ、自棄になり、職場もかわる。さらに飲み屋を営む子連れの英姫を凌辱し、強引に結婚し…。実在の父親をモデルにしたひとりの業深き男の激烈な死闘と数奇な運命を描く衝激のベストセラー。（「BOOK」データベースより）		
359	遠い朝の本たち	須賀敦子	筑摩書房
	人生が深いよろこびと数々の翳りに満ちたものだということを、まだ知らなかった遠い朝、「私」を魅了した数々の本たち。それは私の肉体の一部となり、精神の羅針盤となった―。一人の少女が大人になっていく過程で出会い、愛しんだ文学作品の数々を、記憶の中のひとをめぐるエピソードや、失われた日本の風景を織り交ぜて描く。病床の著者が最期まで推敲を加えた一冊。（「BOOK」データベースより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
360	ファミリービジネス	米谷ふみこ	新潮社
	親類て煩いもんです。誰だって好きではないのに、皆集まってはややこしくしているようなもんです。老母とのつきあい、冠婚葬祭をユーモラスに描く表題作、ロスアンジェルスの暴動を渦中から克明に描く「千一本の火柱」、二つの国の物語。（「BOOK」データベースより）		
361	身閑かならんと欲すれど風熄まず	武田勝彦	Kss出版
	伝説の作家の実像に迫る最新版評伝。再び静かなブームを呼ぶ立原正秋の全生涯を、生前友人として最も身近に接し続けてきた著者が、最新の資料も加え完成した愛読者必読の著。（「BOOK」データベースより）		
362	「無言館」への旅	窪島誠一郎	小沢書店
	あと五分、あと十分、この絵を描きつづけていたい…。戦没画学生の生命への祈りの声を聴く、書下ろしエッセイ。「無言館」建設までの二年は、著者自らの「戦後」を問い、五十年の生を視つめ直す日々となった。（「BOOK」データベースより）		
363	もの食う人々	辺見庸	共同通信社
	人は今、何をどう食べているのか、どれほど食えないのか…。飽食の国に苛立ち、異境へと旅立った著者は、噛み、しゃぶる音をたぐり、紛争と飢餓線上の風景に入り込み、ダッカの残飯からチェルノブイリの放射能汚染スープまで、食って、食って、食いまくる。人びととの苛烈な「食」の交わりなしには果たしえなかった、ルポルタージュの豊潤にして劇的な革命。「食」の黙示録。（「BOOK」データベースより）		
364	理由	宮部みゆき	朝日新聞社
	家が、家族が、そして人がだんだん壊れていく。「一家四人殺し」はなぜ起こったか。宮部みゆき待望の長編ミステリー。（「BOOK」データベースより）		
365	老人力	赤瀬川原平	筑摩書房
	老人力とは何か？物忘れ、繰り言、ため息等、従来ぼけ、ヨイヨイ、耄碌として忌避されてきた現象に潜むとされる未知の力。20世紀末に発見され、日本中に賞賛と感動と勘違いを巻きおこし、国民を脱力させた恐るべき力。（「BOOK」データベースより）		

1999年購入テキスト一覧

	書　　名	著　　者	発 行 所
366	アンジェラの灰	フランク・マコート	新潮社
	飲んだくれで、愛国主義者で、生活能力のない父。涙にくれる母アンジェラ。空腹と戦い、たくましく生きる子どもたち—1930年代のアイルランド南西部の町リムリックを舞台に、極貧のマコート一家の日々と少年の心の奥を、ユーモアとペーソス溢れる美しい文章で描き上げた珠玉の回想録。（「BOOK」データベースより）		
367	兄弟	なかにし礼	文藝春秋
	作詞家として活躍する著者のもとへ、十六年間絶縁状態だった兄の死の報せが届いた—。胸中によみがえる兄の姿。敗戦後に故郷小樽で再会した復員帰りの兄は、どこか人が変っていた。以来、破滅的に生きる兄に翻弄され、苦渋を強いられた弟が、兄の実像と兄弟のどうしようもない絆を、哀切の念をこめて描いた記念碑的傑作。（「BOOK」データベースより）		
368	全ての人は過ぎて行く	中村真一郎	新潮社
	王朝の文学に親しんだ青春時代、そして芹沢光治良、堀辰雄、高見順、辰野隆、渡辺一夫、平岡昇等多くの作家・文学者たちとの出会いと交流を語る「私の履歴書」と、戦後派として生き戦後派として死に臨む心境を綴る「浣花洞随筆」を収録。（「BOOK」データベースより）		
369	東京セブンローズ	井上ひさし	文藝春秋
	戦局いよいよ見通しのない昭和二十年春。東京・根津の団扇屋主人の日記には意外なほど明るく、闊達な庶民の暮らしが細密に綴られる。物資も食糧も乏しい生活だからこそ笑いを求め、シャレを愛する戦時下の日本人。その姿は懐かしく、いとおしい。執筆じつに十七年。歳月と情熱をかたむけた井上文学の最高傑作。（「BOOK」データベースより）		
370	透光の樹	高樹のぶ子	文藝春秋
	「心に決めてたんです…わたし、郷さんの娼婦になるって」25年ぶりに再会した中年男女の激しく一途に燃える愛。汲めども尽きぬ恋心と、逢瀬を重ねるたびに増してゆく肉の悲しみを、著者渾身の熱い文体で描き、第35回谷崎潤一郎賞を受賞。すべての現実感が消えるほどの「結晶のような」透明な恋の物語。（「BOOK」データベースより）		
371	ノモンハンの夏	半藤一利	文藝春秋
	参謀本部作戦課、そして関東軍作戦課。このエリート集団が己を見失ったとき、満蒙国境での悲劇が始まった。司馬遼太郎氏が最後に取り組もうとして果せなかったテーマを、共に取材した著者が、モスクワのスターリン、ベルリンのヒトラーの野望、中国の動静を交えて雄壮に描き、混迷の時代に警鐘を鳴らす。（「BOOK」データベースより）		
372	母	三浦綾子	角川書店
	「わだしは小説を書くことが、あんなにおっかないことだとは思ってもみなかった。あの多喜二が小説書いて殺されるなんて…」明治初頭、十七歳で結婚。小樽湾の岸壁に立つ小さなパン屋を営み、病弱の夫を支え、六人の子を育てた母セキ。貧しくとも明るかった小林家に暗い影がさしたのは、次男多喜二の反戦小説『蟹工船』が大きな評判になってからだ。大らかな心で、多喜二の「理想」を見守り、人を信じ、愛し、懸命に生き抜いたセキの、波乱に富んだ一生を描き切った、感動の長編小説。（「BOOK」データベースより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
373	火花	高山文彦	飛鳥新社
	ハンセン病と闘いながら、名作『いのちの初夜』を著し、二十三歳の命を燃やし尽くして逝った天才作家、北条民雄―。その極限の生命の姿を描く著者会心のノンフィクション。（「BOOK」データベースより）		
374	望潮	村田喜代子	文藝春秋
	老婆の「当たり屋」が大勢いるという噂を確かめるべく、玄界灘の小島を訪れたわたしが目にした光景とは――。「望潮」他六篇収録。（「BOOK」データベースより）		
375	夕映え草子　遥かなる「満州」へ	山田一郎	高知新聞社
	沈む夕陽に、ふと、脳裏をよぎる旧満州の残像、切なく甘い青春と過酷な現実、そして歴史の皮肉と…。蜃気楼のように現れ歴史の彼方に消えたこの”国”で過ごした日々を、気骨のジャーナリストが追懐する。（帯より）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
376	鏡川	安岡章太郎	新潮社
	私の胸中にはいくつかの川が流れている。幼き頃の真間川、蕪村の愛した淀川、そして、浦戸湾にそそぐ鏡川だ…。それは私の先祖や親戚が見た月と同じ月を今宵も写して流れている。（「BOOK」データベースより）		
377	家族それぞれの孤独	永畑道子	岩波書店
	家庭は、学校をしのぐ大切な場所。世の中がどんなに変わろうと、親から与えられた愛の土台さえできていれば、子どもはきっと、社会を変えていく人になる。自らの半生を振り返りながら、教師、親に語りかける感動の書。（「BOOK」データベースより）		
378	後日の話	河野多恵子	文藝春秋
	舞台は17世紀イタリア、トスカーナの小都市。思わぬことで殺人犯となったジャコモは、斬首刑に処せられる直前、面会に来た若妻エレナの鼻を食いちぎった！遺された妻が送ったその後の人生とは？地中海に面した町で繰り広げられる、この上もなく美しくグロテスクで恐ろしい物語。（「BOOK」データベースより）		
379	市民科学者として生きる	高木仁三郎	岩波書店
	専門性を持った科学者が、狭いアカデミズムの枠を超え、市民の立場で行動することは可能なのか。長年にわたって核問題に取り組み、反原発運動に大きな影響を与えてきた著者が、自分史を振り返りつつ、自立した科学者として生きることの意味を問い、未来への希望に基づいた「市民の科学」のあり方を探る。（「BOOK」データベースより）		
380	高らかな挽歌	高井有一	新潮社
	夢を追うのか、現実に身をゆだねるのか。生き残るためにはどちらかを選択しなくてはならないのか。時代は高度成長期、舞台は唯一衰退していく映画産業界。映画に情熱を賭けつつも、会社という組織に生きた男の夢と挫折。バブル崩壊後の時代を先取りした、著者会心の大作。（「BOOK」データベースより）		
381	長崎ぶらぶら節	なかにし礼	文藝春秋
	長崎の丸山遊里に愛八という名の芸者がいた。彼女が初めて本当の恋をしたのが、長崎学の研究者・古賀十二郎。「な、おいと一緒に、長崎の古か歌ば探して歩かんね」—忘れられた名曲「長崎ぶらぶら節」との出会い。そして父親のいない貧しい少女・お雪をはじめ、人人に捧げた無償の愛を描く。第122回直木賞受賞作。（「BOOK」データベースより）		
382	夏の終わりに	ロザムンド・ピルチャー	青山出版
	夏の終わりのスコットランド—澄んだ空気と、深く碧い湖。ヒースの草原を渡り鳥が横切るころ、秋風が冬の足音をはこんでくる。広大なスコットランドを舞台に描かれる夏の日の恋のゆくえ—せつなく胸にせまる愛の物語。（「BOOK」データベースより）		
383	羽根と翼	黒井千次	講談社
384	「アシザワさんでしょう？クボシマは死にましたよ」。黒いマントの女が、俺の時間の闇に誘い込む。小説的醍醐味に満ちた黒井文学の傑作。（「BOOK」データベースより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
385	ピカレスク　太宰治伝	猪瀬直樹	小学館
	「井伏さんは悪人です」。太宰が遺書に書いた言葉の意味は何だったのか？親兄弟、友人知人を騙り、窮地に陥る度に自殺未遂を起こした太宰。その太宰を冷徹に観察し、利用した井伏。二人の文士は、ともに「悪漢」であった。師弟として知られる井伏鱒二と太宰治の、人間としての素顔を赤裸々に描く傑作評伝ミステリー。（「BOOK」データベースより）		
386	秘事	河野多恵子	新潮社
	楽しみにしていてくれ、僕の臨終の時には素晴らしい言葉を聞かせるから—夫は妻に何を伝えようとしたのだろうか？綜合商社の役員・三村清太郎と妻・麻子はともに昭和１１年生まれ。人も羨む仲の二人だったが、その結婚には、ある事故が介在していた…。夫婦という「かくも素晴らしき日々」。２１世紀の小説を先駆ける傑作長編。（「BOOK」データベースより）		
387	私	津島祐子	新潮社
	どうしても語り伝えたい—が、いつも、そこにいた。（「BOOK」データベースより）		
388	我々はなぜ戦争をしたのか	東大作	岩波書店
	一九九七年、ハノイ、マクナマラ元米国務長官ら、ベトナム戦争を戦った両国要人らが対話した。この戦争はなぜ回避できなかったのか？なぜ早期に終結できなかった？なぜ機会を失したか？真摯な、ときに激烈な討論の中で明かされたのは、悲惨なまでの互いの無知、無理解、誤認…二〇世紀の戦争をめぐる対話がもたらす、二一世紀の紛争解決・平和構築に向かう巨大な教訓。（「BOOK」データベースより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
389	あかね空	山本一力	文藝春秋
	希望を胸に身一つで上方から江戸へ下った豆腐職人の永吉。己の技量一筋に生きる永吉を支えるおふみ。やがて夫婦となった二人は、京と江戸との味覚の違いに悩みながらもやっと表通りに店を構える。彼らを引き継いだ三人の子らの有為転変を、親子二代にわたって描いた第126回直木賞受賞の傑作人情時代小説。（「BOOK」データベースより）		
390	書かれなかった戦争論	山中恒／山中典子	勁草書房
	なぜ戦時史はわかりにくいのか？戦時史を読み解くキーワードに『間違いだらけの少年H』の少国民Hと戦後派Nのコンビが当時の新聞雑誌、刊行物、未公開資料を渉猟して挑戦しました。（「BOOK」データベースより）		
391	片想い	東野圭吾	文藝春秋
	帝都大アメフト部のOB西脇哲朗は、十年ぶりにかつての女子マネージャー日浦美月に再会し、ある「秘密」を告白される。あの頃の未来にいるはずの自分たちは、変わってしまったのだろうか。過ぎ去った青春の日々を裏切るまいとする仲間たちを描く傑作ミステリー。（TRC MARCより）		
392	現代イスラムの潮流	宮田律	集英社
	グローバル化の現在、12億人の人々が暮らすイスラム社会への理解なしに、われわれは世界を語れない。本書は、イスラムの歴史や思想、そして現代イスラムの潮流を、わかりやすく読み解く格好の入門書である。（「BOOK」データベースより）		
393	五年の梅	乙川優三郎	新潮社
	友を助けるため、主君へ諫言をした近習の村上助之丞。蟄居を命ぜられ、ただ時の過ぎる日々を生きていたが、ある日、友の妹で妻にとも思っていた弥生が、頼れる者もない不幸な境遇にあると耳にし—「五年の梅」。表題作の他、病の夫を抱えた小間物屋の内儀、結婚を二度もしくじった末に小禄の下士に嫁いだ女など、人生に追われる市井の人々の転機を鮮やかに描く。（「BOOK」データベースより）		
394	「自分の木」の下で	大江健三郎	朝日新聞社
	なぜ子供は学校に行かなくてはいけない？素朴な疑問に、ノーベル賞作家はやさしく、深く、思い出もこめて答える。子供から大人までにおくる16のメッセージ。心の底にとどまる感動のエッセイ。（「BOOK」データベースより）		
395	蕭々館日録	久世光彦	中央公論社
	夜ごと「蕭々館」でくりひろげられる、文学談義、名文暗誦合戦、そして嘘か真か判然としない話の数々…。芥川龍之介、菊池寛、小島政二郎。青春をともにした三人の作家を描きながら「大正」という時代への想いを綴る傑作長篇。泉鏡花文学賞受賞作。（「BOOK」データベースより）		
396	高知県昭和期小説名作集　12　田中英光		高知新聞社
	「オリンポスの果実」の主人公の「ぼく」は、オリンピックへの「黄金の日々」、「一種青春の酩酊のごとき」船旅の途上、ふと知り合った同郷の女子陸上部の選手に一目惚れしてしまう。（「解題」より）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
397	白痴群	車谷長吉	新潮社
	書くことは、私には悲しみであり、恐れである—業曝しの精神史としての私小説。（「BOOK」データベースより）		
398	北京報道700日	古森義久	PHP研究所
	前に進まないウサギ、姿を消す猫、空飛ぶブタ…中国報道はまさに「ワンダーランド」だった！第一級の国際報道記者が迷い込んだ「異常」な世界。（帯より）		
399	水の舳先	玄侑宗久	新潮社
	温泉施設「ことほぎの湯」には、重い病を忠う人が集まったくる。僧・玄山は書道教室を開き、彼らの相談相手になっていた。末期癌の久美子は明るい人気者だが、心に深い孤独を秘めたクリスチャン。あるとき、彼女は身寄りもなく死んでいく男を懸命に世話する。そして、自らの死を悟った久美子が玄山に告白した「罪」とは…。多様な宗教観にたつ人間の病と死を描き、究極の癒しを問う衝撃のデビュー作。（「BOOK」データベースより）		
400	朗読者	ベロンハルト・シュリンク	新潮社
	15歳のぼくは、母親といってもおかしくないほど年上の女性と恋に落ちた。「なにか朗読してよ、坊や！」—ハンナは、なぜかいつも本を朗読して聞かせて欲しいと求める。人知れず逢瀬を重ねる二人。だが、ハンナは突然失踪してしまう。彼女の隠していた秘密とは何か。二人の愛に、終わったはずの戦争が影を落していた。現代ドイツ文学の旗手による、世界中を感動させた大ベストセラー。（「BOOK」データベースより）		

2002年購入テキスト一覧

	書　　名	著　　者	発 行 所
401	運命の足音	五木寛之	幻冬舎
	人はおのれの運命を感知することができるのだろうか？はたして天寿というものを知ることは可能なのか？生まれた場所と時代、あたえられた「運命」によって人が背負ってきたものは何か。戦後五十七年、胸に封印して語りえなかった悲痛な記憶の物語。驚愕の真実から、やがて静かな感動と勇気が心を満たす。（「BOOK」データベースより）		
402	絹扇	津村節子	岩波書店
	白羽二重で知られる福井の絹織物業を陰で支えた機織りの女性たち。貧しくとも情感豊かな庶民の姿と、機織りに生きる女の半生を福井の産業史に重ねて描く秀作。（「BOOK」データベースより）		
403	四国遍路	辰濃和男	岩波書店
	四国八十八カ所。金剛杖を手に、千数百キロをひたすら歩く。人びとと出あい、自然の厳しさに打たれつつ歩む巡礼行を、達意の文章で綴る連作エッセイ。（「BOOK」データベースより）		
404	シジフォスの勲章	宮原昭夫	河出書房新社
	障害者のための地域作業所づくりを背景に、障害児の生と死を光源にして健常者の病根を照らしだす書き下ろし小説。（「BOOK」データベースより）		
405	釈迦	瀬戸内寂聴	新潮社
	この世は美しい。人の命は甘美なものだ—。釈迦80歳、涅槃に至る最後の旅—寂聴80歳、入魂の大作。（「BOOK」データベースより）		
406	星宿海への道	宮本輝	幻冬舎
	中国南西端の地より、燃え盛る炎を胸に男は姿を消した。父の顔も知らぬ幼な子をかかえて生きる女と、兄を追う弟のたぎる想い。その愛しい生命の絆の再生を鮮烈に描く感動巨編、ここに誕生。（「BOOK」データベースより）		
407	センセイの鞄	川上弘美	平凡社
	「センセイ」とわたしが、過ごした、あわあわと、そして色濃く流れゆく日々。川上弘美、待望の最新長篇恋愛小説。（「BOOK」データベースより）		
408	小さき者へ	重松清	毎日新聞社
	お父さんが初めてビートルズを聴いたのは、今のおまえと同じ歳—十四歳、中学二年生の時だった。いつも爪を噛み、顔はにきびだらけで、わかったふりをするおとなが許せなかった。どうしてそれを忘れていたのだろう。お父さんがやるべきこと、やってはならないことの答えは、こんなに身近にあったのに…心を閉ざした息子に語りかける表題作ほか、「家族」と「父親」を問う全六篇。（「BOOK」データベースより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
409	DUTY［デューティ］ わが父、そして原爆を落とした男の物語	ボブ・グリーン	光文社
	二十年にわたり、広島に原爆を投下した男を追い続けてきたボブ・グリーンは、九八年秋、その取材に成功する。世代を隔てた二人の間に芽生えた奇妙な友情。ついに重い口を開いた老人の話から、グリーンは、それまで理解することのできなかった自分の父とその世代に生きた男たちの真情を知る…。（「BOOK」データベースより）		
410	東南アジアの弟たち	上遠野寛子	暁印書館
	南方からのメッセージ◇幻の本郷町◇出会い◇本郷寮のあけくれ◇スパイ◇素顔の南方特別留学生◇戦火のあとに◇一九七七年◇太平洋戦争前の一アメリカ留学生◇いま、日本に思うこと （「BOOK」データベースより）		
411	ひとは化けもん　われも化けもん	山本音也	文藝春秋
	井原西鶴の自作は『好色一代男』だけだったのか？大戯作者の深い闇に迫る時代快作。（帯より）		
412	忿翁	古井由吉	新潮社
	あの凄惨でどこか晴れやかな忿怒の老人は死んだ父親なのか、私なのか、それとも幻の息子なのか。鋭い感性と濃密な文体で、現代の狂気と正気、夢と現実の狭間に踏み入る長編小説。（「BOOK」データベースより）		

2003年購入テキスト一覧

	書　　名	著　　者	発 行 所
413	趣味は読書	斎藤美奈子	平凡社
	ベストセラーなのに読んでいる人が周りにほとんどいないのはなぜか? 今まで誰もが気づきながら口にしなかった出版界最大の謎に挑む。（「BOOK」データベースより）		
414	引き裂かれる世界	サミュエル・ハンチントン	ダイヤモンド社
	2001年、NYでテロ事件が発生。ついに起こった「文明の衝突」。このあと、世界はどう動くのか。キリスト教圏vsイスラム、アメリカvs中国、そして日本の行方は? それに対するひとつの答えがここにある。（TRC MARCより）		
415	あてになる国のつくり方	井上ひさし・生活者大学校講師陣	光文社
	「バタフライ効果」をご存知か!?蝶の羽の動きがあたりの空気をわずかに震わせる。そのかすかな動きが伝わって大きな波動を呼び、ついには気圧を変え、大嵐を発生させることがある。「一方的に国の命令を聞けという官の主張」に流されず、フツ一人がまず自覚し、責任を果たさなければいけないと、本書は説く。一人ひとりが生き方を考えることで、世界は変えられる。（「BOOK」データベースより）		
416	はるかなる旅路	青木修子	文芸社
	最初の人間はどうやって生まれてきたのだろう。地球や太陽や月や星はどうやって出来たのだろう。幼い頃の疑問を、一生かけて探求してきた著者がいま、「人間はどこから来て、どこへ行くのか」と、大いなる問いかけをする。（「BOOK」データベースより）		
417	高知市歴史散歩	広谷喜十郎	高知市文化振興事業団
	高知市広報あかるいまちの人気連載が本になった。これ読んで、散歩にでかける。でかけたくなる。（帯より）		
418	鷹の渡る空	鍋島寿美枝	高知新聞社
	22歳の娘の理由なき自殺を見つめ続けた母親。その心のうちを丁寧にたどる「青春の書、母性の歌」。著者自身の体験を随筆風に綴った部分と、娘の日記をもとにフィクションを加えて小説風にまとめた部分とで構成。（TRC MARCより）		
419	鬼哭啾啾	辛淑玉	解放出版社
	在日朝鮮人3世として生きる辛淑玉の個人史。帰国運動によって、北へ渡った祖父、叔父たちの運命−。今、北朝鮮民衆へまで憎悪の連鎖が広がる中、在日朝鮮人差別に抗して問う。（TRC MARCより）		
420	詩の発見	西一知	高知新聞社
	人は本来みな詩人である。詩を生きる喜びが、だれにでも優しく伝わってくる。（帯より）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
421	博士の愛した数式	小川洋子	新潮社
	「ぼくの記憶は80分しかもたない」博士の背広の袖には、そう書かれた古びたメモが留められていた—記憶力を失った博士にとって、私は常に“新しい”家政婦。博士は“初対面”の私に、靴のサイズや誕生日を尋ねた。数字が博士の言葉だった。やがて私の10歳の息子が加わり、ぎこちない日々は驚きと歓びに満ちたものに変わった。あまりに悲しく暖かい、奇跡の愛の物語。（「BOOK」データベースより）		

2004年購入テキスト一覧

	書　　名	著　　者	発 行 所
422	老人のための残酷童話	倉橋由美子	講談社
	鬼に変貌していく老婆を捨てた息子と、その嫁の意外な末路とは…。「姥捨山」や、織女と牽牛の「天の川」といった、有名な昔話をベースにしながらも、独特の解釈で綴られた10の物語。（「BOOK」データベースより）		
423	蛇にピアス	金原ひとみ	集英社
	私の血肉になれ、何もかも私になればいい。なにもかも私に溶ければいい。芥川賞受賞。暗い時代を生き抜く若者の、受難と喪失の物語。（帯より）		
424	敗北を抱きしめて　上・下	ジョン・ダワー	岩波書店
	敗戦後日本人の苦難の歩みを描いて、日本中に感動を巻き起こした名著の写真増補版。旧版の2．5倍以上に増補された貴重な写真は、著者みずからによって本文といっそう緊密に組み合わされ、敗北を抱きしめて立ち上がった民衆の類まれな経験を語り尽くす。ヴィジュアル史料と文字史料が織り成す陰影深い戦後史像の誕生。　（「BOOK」データベースより）		
425	春の数えかた	日高敏隆	新潮社
	自然界の不思議、生きものたちの行動、人と自然の関係などなど、動物行動学者による発見に充ちたエッセイ。「波」好評連載『猫の目草』待望の単行本。（「BOOK」データベースより）		
426	ケータイを持ったサル	正高信男	中央公論新社
	「ひきこもり」など周囲とのコミュニケーションがうまくとれない若者と、「ケータイ」でいつも他人とつながりたがる若者。両者は正反対に見えるが、じつは成熟した大人になることを拒否する点で共通している。これは「子ども中心主義」の家庭で育った結果といえる。現代日本人は「人間らしさ」を捨て、サルに退化してしまったのか?気鋭のサル学者による、目からウロコの家族論・コミュニケーション論。（「BOOK」データベースより）		
427	介護入門	モブ・ノリオ	文藝春秋
	29歳、無職の〈俺〉。寝たきりの祖母を自宅で介護し、大麻に耽る――。饒舌な文体でリアルに介護と家族とを問う、衝撃のデビュー作。　（「BOOK」データベースより）		
428	漢字と日本人	高島俊男	文藝春秋
	本来、言語の実体は音声である。しかるに日本語では文字が言語の実体であり、漢字に結びつけないと意味が確定しない。では、なぜこのような顛倒が生じたのか?漢字と日本語の歴史をたどりながら、その謎を解きあかす。（「BOOK」データベースより）		
429	こころの旅	神谷美恵子	日本評論社
	人のこころのたどるはるかな旅路には、たちむかわなければならない嵐があり、越えなければならないいくつもの峠がある。本書はひろい視野をもつ体験ゆたかな一精神科医が、あたたかい筆致で人のこころの一代を語る。「結婚を決意させた運命の一冊」として、テレビや週刊誌で紹介された話題の本。紀子さんの愛読書。（「BOOK」データベースより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
430	春にして君を離れ	アガサ・クリスティー	早川書房
	優しい夫、よき子供に恵まれ、女は理想の家庭を築き上げたことに満ち足りていた。が、娘の病気見舞いを終えてバグダッドからイギリスへ帰る途中で出会った友人との会話から、それまでの親子関係、夫婦の愛情に疑問を抱きはじめる…女の愛の迷いを冷たく見据え、繊細かつ流麗に描いたロマンチック・サスペンス。（「BOOK」データーベースより）		
431	マークスの山　上・下	高村薫	講談社
	昭和51年南アルプスで播かれた犯罪の種は16年後、東京で連続殺人として開花した—精神に〈暗い山〉を抱える殺人者マークスが跳ぶ。元組員、高級官僚、そしてまた…。謎の凶器で惨殺される被害者。バラバラの被害者を結ぶ糸は?マークスが握る秘密とは?捜査妨害の圧力に抗しながら、冷血の殺人者を追いつめる警視庁捜査第一課七係合田刑事らの活躍を圧倒的にリアルに描き切る本格的警察小説の誕生。　（「BOOK」データベースより）		
432	グランド・フィナーレ	阿部和重	講談社
	「神町」そして、ふたたび…。土地の因縁がつなぐ物語。終わりという名のはじまり。表題作「グランド・フィナーレ」ほか三篇を収録。第132回芥川賞受賞作。（「BOOK」データベースより）		

2005年購入テキスト一覧

	書　　名	著　　者	発 行 所
433	鬼の研究	馬場あき子	筑摩書房
	かつて都大路を百鬼夜行し、一つ目、天狗、こぶ取りの鬼族が世間狭しと跳梁し、また鬼とならざるを得なかった女たちがいた。鬼は滅んだのだろうか。いまも、この複雑怪奇な社会機構と人間関係の中から、鬼哭の声が聞こえはしないか。日本の歴史の暗部に生滅した〈オニ〉の情念とエネルギーを、芸能、文学、歴史を捗猟しつつ、独自の視点からとらえなおし、あらためてその哲学を問う名篇。（「BOOK」データベースより）		
434	コンスタンティノープルの陥落	塩野七生	新潮社
	東ローマ帝国の首都として一千年余も栄えたコンスタンティノープル。独自の文化を誇ったこの都も、しかし次第に衰え、15世紀後半には、オスマン・トルコ皇帝マホメッド二世の攻撃の前に、ついにその最期を迎えようとしていた—。地中海に君臨した首都をめぐる、キリスト教世界とイスラム世界との激しい覇権闘争を、豊富な資料を駆使して描く、甘美でスリリングな歴史絵巻。（「BOOK」データベースより）		
435	アフガニスタンの診療所から	中村哲	筑摩書房
	幾度も戦乱の地となり、貧困、内乱、難民、人口・環境問題、宗教対立等に悩むアフガニスタンとパキスタンで、ハンセン病治療に全力を尽くす中村医師。氏と支援団体による現地に根ざした実践から、真の国際協力のあり方が見えてくる。（「BOOK」データベースより）		
436	銃口　上・下	三浦綾子	小学館
	昭和元年、北森竜太は北海道旭川の小学4年生。納豆売りをしている級友芳子に対する担任坂部先生の温かい言葉に心打たれ、教師を志す。日中戦争が始まった昭和12年、小学校教師となった竜太は、生徒をいつくしみ、芳子との幸せな愛をはぐくんでいた。その二人の背後に無気味な足音—それは苛酷な運命の序曲だった。三浦文学の最新長編。（「BOOK」データベースより）		
437	新訳　星の王子さま	サン＝テグジュペリ	宝島社
	「大人って、とても変だ」そう思いながら王子様は旅を続けた。“かつて子供だった”人のために書かれた永遠の名作。（「BOOK」データベースより）		
348	まごころ　哲学者と随筆家の対話	鶴見俊輔／岡部伊都子	藤原書店
	「不良少年」であり続けることで知的練磨を重ねてきた哲学者・鶴見俊輔。「学歴でなく病歴」の中で思考を深めてきた随筆家・岡部伊都子。ほんとうの歴史をぬき、来るべき社会のありようを、本音で語り尽くす。（帯より）		
439	花まんま	朱川湊人	文藝春秋
	大人になったあなたは、何かを忘れてしまっていませんか?大阪の路地裏を舞台に、新進気鋭の著者が描く六篇の不思議な世界。（「BOOK」データベースより）		
440	姥ざかり花の旅笠	田辺聖子	集英社
	江戸、天保の頃。筑前の商家のお内儀達がお伊勢詣りに出立する。一行は、仲良し五十代女四人と荷物持ち兼ボディガードの男三人。家業を子に譲ってから、和歌を学び、古典の教養溢れる女達の旅はエネルギッシュ。伊勢参宮から、信濃の善光寺、ここまでくれば日光詣りもと突き進み、江戸見物から東海道、京・大坂へ、海路陸路の五ヶ月八百里一。生気躍動する女旅の豊かな愉しさが甦る知的冒険お買い物紀行。（「BOOK」データベースより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
441	能楽への招待	梅若猶彦	岩波書店
	面の中で両眼をふさいだり、「心」字形に杖をついて歩いたり…、能の演出には不思議が何と多いことか。じつはここにこそ、身体と精神の融合という能の世界独特の本質がある。「型附」という秘伝書には何が書かれているのか、世阿弥が到達した最高の美は「幽玄」なのか。基礎知識から本質論まで、演技者の眼からズバリと解説した斬新な能楽入門書。（「BOOK」データベースより）		
442	静かな大地	池澤夏樹	朝日新聞社
	明治初年、北海道の静内に入植した和人と、アイヌの人々の努力と敗退。日本の近代が捨てた価値観を複眼で見つめる、構想10年の歴史小説。（「BOOK」データベースより）		
443	深尾くれない	宇江佐真理	新潮社
	鳥取藩士・深尾角馬は短躯ゆえの反骨心から剣の道に邁進してきた。いまでは藩の剣法指南役も勤め、藩主の覚えもめでたき身。しかし姦通した新妻を、次いで後妻をも無残に斬り捨てた角馬の狂気は周囲を脅かす。やがて一人娘・ふきの不始末を知った時、果たして角馬の胸中に去来したものは…。紅牡丹を愛し、雖井蛙流を起こした剣客の凄絶な最期までを描き切った異色の長編時代小説。（「BOOK」データベースより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
444	古武術に学ぶ身体操法	甲野善紀	岩波書店
	◎桑田真澄投手　新生の軌跡◎私と古武術との出会い◎古武術と現代武道はどう違うのか◎「捻らない、うねらない、ためない」身体の使い方とは？◎だれもが身につけたほうがいい、上手な「転び方」 ◎発想を育てる（「BOOK」データベースより）		
445	守城の人　明治人柴五郎大将の生涯	村上兵衛	光人社〈774P〉
	その生涯に二度「敗戦」の悲哀を味わった風雲児柴五郎―十歳のとき会津落城を、そして八十八歳のとき陸軍の最長老として大日本帝国の敗北を…。政治小説「佳人の奇遇」で文名を謳われた柴四朗を兄に持ち、北京篭城戦でその名を世界にとどろかせ、賊軍の出ながら大将にまで昇りつめた波瀾万丈の足跡を辿る。（「BOOK」データベースより）		
446	大江戸えころじ一事情	石川英輔	講談社〈361p〉
	太陽エネルギーを最も有効活用していた江戸時代の暮らしを紹介。化学エネルギーの導入で進歩と便利さが追求されていった現代までの変遷にも触れつつ、私たちの暮らしの未来を考える。図版資料多数。（TRC MARCより）		
447	カカシの夏休み	重松清	文藝春秋〈410p〉
	ダムの底に沈んだ故郷を出て二十年、旧友の死が三十代も半ばを過ぎた同級生たちを再会させた。帰りたい、あの場所に―。家庭に仕事に難題を抱え、人生の重みに喘ぐ者たちを、励ましに満ちた視線で描く表題作始め三編を収録。現代の家族、教育をテーマに次々と話題作を発信し続ける著者の記念碑的作品集。（「BOOK」データベースより）		
448	カラシニコフ	松本仁一	朝日新聞社〈269p〉
	フセイン大統領が捕まったとき、日本人外交官が殺害されたとき、若者三人が誘拐されたとき、いつもそこにあった一。「悪魔の銃」、カラシニコフ。ひとびとや国家にとって、銃とはいったいなになのだろう。朝日新聞大好評連載、待望の書籍化。（「BOOK」データベースより）		
449	へんな子じゃないもん	ノーマ・フィールド	みすず書房〈253p〉
	幼い日の想い出、寝たきりの祖母と過ごしたかけがえのない日々、地下鉄で拾った会話まで、愛情に満ちた視点で過去の日々を綴る。ばらばらな歴史の一片一片を繋いだ、子ども時代と日本の戦後史のメモワール。（TRC MARCより）		
450	国語教科書の思想	石原千秋	筑摩書房〈206p〉
	教材はどのように選ばれ、読解力低下はなぜ生じたのか？小・中学校の教科書をテクストに国語教科書が子供たちに伝えようとする思想がどのような表現や構成によって作られているかを分析し、隠されたイデオロギーを暴き出す。（帯より）		
451	ゾフィー21歳	ヘルマン・フィンケ	草風館〈222p〉
	1943年2月、ゾフィー・ショルは兄たちとともに「反逆準備及び敵側幇助」の罪名で、手斧による斬首刑を執行される。21歳だった…。年令を問わず、いかに生き、そして死ぬのか。日本人に贈られる清冽なメッセージ。（TRC MARCより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
452	釜ヶ崎と福音	本田哲郎	岩波書店〈243p〉
	底辺の底辺に立つ者、イエス。釜ヶ崎でのある出会いに始まる、魂のあゆみと実践の記録。解放と回心をもたらす力は、弱くしいたげられた者の側に…。比類なき「選び」の解釈によってイエス像と福音の意味をとらえ直す。（TRC MARCより）		
453	華族	小田部雄次	中央公論新社〈365p〉
	明治維新後、旧公卿・大名、維新功労者などから選ばれた華族。多くの特権を享受した彼らは、近代日本の政治、生活様式をリードした「恵まれた階級」のはずだった。７８年間に１０１１家存在したその実像とは。「華族一覧」付。（帯より）		
454	妖精と妖怪の間　評伝・平林たい子	群ようこ	文藝春秋〈203p〉
	繊細にして大胆。疑り深くて正直。無邪気にして老獪。独特の作品世界と強いバイタリティで文壇とジャーナリズムに大きな足跡を残した平林たい子。昭和の大「女傑」作家の素顔をみつめた評伝。（帯より）		
455	褐色の文豪	佐藤賢一	文藝春秋〈519p〉
	「黒い悪魔」ことデュマ将軍の息子アレクサンドル・デュマは、父親譲りの豪胆さ、集中力を武器にパリで劇作家への道を歩みだし、ついには大傑作「三銃士」を著すが…。パリ文壇を征服したデュマ2世の波乱万丈の人生！　（「BOOK」データベースより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
456	ババロン伝説	美帆シボ	柏艪舎〈362p〉
	「人なき人影の街」を探すという使命を受け、世界中を旅するババロン。現代社会を風刺する様々な国や土地を巡り、辿りついた目的の街とは、原爆で滅んだ街だった。反戦・反核を主軸に据えた、大人も楽しめるファンタジー。（TRC MARCより）		
457	寺田寅彦　妻たちの歳月	山田一郎	岩波書店〈774p〉
	夏子、寛子、紳の3人の妻たちの歳月を、新資料もまじえながらつぶさに辿り、寺田寅彦の生涯をあざやかに照射する、寅彦研究の第一人者による評伝。『高知新聞』連載に加筆して単行本化。（「BOOK」データベースより）		
458	水滴	目取真俊	文藝春秋〈181p〉
	ある日、右足が腫れて水があふれ出た。夜な夜なそれを飲みにくるのは誰か?沖縄を舞台に過去と現在が交錯する、奇想天外な物語!芥川賞受賞作。（「BOOK」データベースより）		
459	父さんのからだを返して　父親を骨格標本にされたエスキモーの少年	ケン・ハーバー	早川書房〈357p〉
	20世紀初頭のニューヨーク、一人のエスキモーが「文明」の中に「野蛮」を見た―。文明の傲慢さと無理解に翻弄されたエスキモーの少年の彷徨を、当時の探検熱と人類学のありようを批判的に俯瞰しながら描き出した衝撃の物語。（TRC MARCより）		
460	湖の南	富岡多恵子	新潮社〈185p〉
	13歳で明治維新を、16歳で廃藩置県を、20代で西南戦争を体験し、巡査となった津田三蔵。病いがちの母を案じ、困った兄に悩まされ、妹には櫛や半襟を見立ててやる。不器用で几帳面、ごくまっとうなこの男が、なぜロシア皇太子を襲ったのか。近代化から逸れ、否応なく追いつめられていった一人の男の悲劇を、愛惜をこめて描き出す。（「BOOK」データベースより）		
461	テロリストのパラソル	藤原伊織	角川書店〈381p〉
	東京・新宿の公園で爆破事件が発生、多数の死者が出た。犠牲者のなかに「私」のただひとりの女性、ただひとりの友人がいた。1995年度、江戸川乱歩賞受賞作品。（「BOOK」データベースより）		
462	刀狩り	藤木久志	岩波書店〈243p〉
	秀吉からマッカーサーまで、刀狩りの実態を検証して、武装解除された「丸腰」の民衆像から、武器を封印する新たな日本民衆像への転換を提言する。（表紙裏より）		
463	いま、米と田んぼが面白い（「現代農業」特集号）		農山漁村文化協会〈260p〉
	「たたかうごはん自治の米」「いま、米と田んぼが面白い」「つくり続ける心　食べ続ける心」「食の主権」を取り戻す」の四部構成で、日本の農業の今を問う。（目次より）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
464	中国の大盗賊・完全版	高島俊男	講談社〈327p〉
	昔、中国に「盗賊」というものがいた。いつでもいたし、どこにでもいた。日本のどろぼうとはちょっとちがう。中国の「盗賊」はかならず集団である。これが力をたのんで村や町を襲い、食料や金や女を奪う。へんぴな田舎のほうでコソコソやっているようなのは、めんどうだから当局もほうっておく。ところがそのうちに大きくなって、都市を一つ占拠して居坐ったりすると、なかなか手がつけられなくなる。さらに大きくなって、一地方、日本のいくつかの県をあわせたくらいの地域を支配したなんてのは史上いくらでも例がある。しまいには国都を狙い、天下を狙う。実際に天下を取ってしまったというのも、また例にとぼしくないのである。幻の原稿150枚を完全復元。共産党の中国とは盗賊王朝である。劉邦から毛沢東まで伝説の完全版がよみがえる。（「BOOK」データベースより）		
465	対談　笑いの世界	桂米朝／筒井康隆	朝日新聞社〈233p〉
	片や落語界の重鎮、片や日本を代表するSF作家。ともに「笑い」を追及してきた二人が、漫才や映画、歌舞伎にまで話題を広げ、蘊蓄を披露しあう様は、さながら競演会だ。（裏表紙より）		
466	死顔	吉村昭	新潮社〈157p〉
	生と死を凝視しつづけた作家が、兄の死を題材に自らの死生観を凝縮し、死の直前まで推敲をつづけた短編「死顔」。（「BOOK」データベースより）		
467	新祖国論	辻井喬	集英社〈254p〉
	誰がグローバリズムとマーケティング病に汚染された国を築いたか?祖国再建の手がかりを探る!（「BOOK」データベースより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
468	言葉の海へ	高田宏	洋泉社
	日本初の近代国語辞書「言海」を完成させた大槻文彦。その波乱に満ちた生涯を真のナショナリストの典型として感動的に描き出す。（TRC MARCより）		
469	迷路　上・下	野上弥生子	岩波書店
	左翼運動に身を投じて転向した管野省三を主人公に、出身の異なる友人を配して、日本ファシズムの時代を苦渋ににみちて生きた青年像を描きつつ、時代を動かした支配層の生活と思想をも作者の筆は精緻にとらえる。（帯より）		
470	旗本夫人が見た江戸のたそがれ	深沢秋男	文藝春秋
	なんと江戸の近いこと！離婚し、再婚。血縁なきカゾクとの円満な暮し。幕政批判、創作、大の酒豪。スーパー才女の克明な日記から浮かび上がる幕末の真の姿、近代の知性の芽ばえ。（「BOOK」データベースより）		
471	カシオペアの丘で　上・下	重松清	講談社
	肺の腫瘍は、やはり悪性だった…。40歳を目前にして人生の「終わり」を突きつけられたその日、俊介はテレビ画面に、いまは遊園地になったふるさとの丘を見つける。封印していた記憶が突然蘇る。僕は何かに導かれているのだろうか…。（帯より）		
472	いのちのレッスン	新藤兼人	青草書房
	八十二歳で音羽さんに死なれたときはまいった。部屋であぐらをかいて、じっとして、ただひたすら孤独を受け入れた。…わたしは石のようだったろう。しかし、トイレにも行きたくなる。いくら食欲がなくても、何かつまみたくなった。人間の生理とはありがたいものだ。いつまでも石になってはいられない。次第に孤独が、もう一つの側面を見せた。…これからわたしは、このすがすがしさを満喫して生きていくのだ。そう思うと、一人の老後は悪くない。（帯より）		
473	ルポ　貧困大国アメリカ	堤未果	岩波書店
	「教育」「いのち」「暮らし」という、国民に責任を負うべき政府の主要業務が「民営化」され、市場の論理で回されるようになった時、はたしてそれは「国家」とよべるのか？私たちには一体この流れに抵抗する術はあるのだろうか？単にアメリカという国の格差・貧困問題を超えた、日本にとって決して他人事ではないこの流れが、いま海の向こうから警鐘をならしている。（帯より）		
474	旅をする木	星野道夫	文藝春秋
	広大な大地と海に囲まれ、正確に季節がめぐるアラスカ。1978年に初めて降り立った時から、その美しくも厳しい自然と動物たちの生き様を写真に撮る日々。その中で出会ったアラスカ先住民族の人々や開拓時代にやってきた白人たちの生と死が隣り合わせの生活を、静かでかつ味わい深い言葉で綴る。（解説・池澤夏樹）（「BOOK」データベースより）		
475	なげださない	鎌田実	集英社
	過酷な運命を背負っていても、ハンディがあっても、ひとつのいのちを、ていねいに生きている人たちがいる。自分のつらさを横に置いて、人のために生きられる人たちがいる。赤ひげ先生、鎌田實が迫った心温かドキュメント!「がんばらない」を超える感動！なげださない人だけが開けられる、至福の扉。（「BOOK」データベースより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
476	雪	オルハン・パムク	藤原書店
	１９９０年代初頭、トルコ北東部の地方都市カルス。雇われ記者の詩人Kaは、イスラム過激派によるクーデター事件に遭遇し、宗教と暴力の渦中に巻き込まれ…。世界４０か国語に翻訳され、各国でベストセラーとなった超話題作。（TRC MARCより）		
477	シズコさん	佐野洋子	新潮社
	私は正気の母さんを一度も好きじゃなかった。いつも食ってかかり、母はわめいて泣いた。そしてその度に後悔した。かわいそうな母さん。かわいそうな私達。人生って気が付いたときはいつも間に合わなくなっているのだ。（帯より）		
478	霧のむこうに住みたい	須賀敦子	河出書房新社
	単行本にこれまで未収録だったエッセイを中心にまとめた1冊で、書評集日記などをのぞいては、おそらく最期の作品集になるという。七年目のチーズ、ビアンカの家、アスパラガスの記憶…。目次を見るだけで、須賀敦子さんの本だとわかる。さっぱりした言葉たち。（江國香織）（「あとがき」より）		
479	ともだちは海のにおい	工藤直子	理論社
	お茶のすきないるかとビールがすきなくじらが友達になった。ふたりは散歩したり、読書したり、手紙を書いたり、あこがれのパリに出かけたりします。ユーモアに満ちた友情の日々を詩と掌編でつづる。（「BOOK」データベースより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
480	歴史のかげにグルメあり	黒岩比佐子	文藝春秋〈254p〉
	旨い食事で接待すれば、それで政治も外交もうまくいく？ペリーの黒船以来、豪華な食事が歴史をつくってきた。胃袋と味覚でたどる、味わい濃厚な日本近代のフルコース。（「BOOK」データベースより）		
481	時が滲む朝	楊逸	文藝春秋〈150p〉
	天安門事件前夜から北京五輪前夜まで。中国民主化勢力の青春と挫折。梁浩遠と謝志強。二人の中国人大学生の成長を通して、現代中国と日本を描ききった力作。（「BOOK」データベースより）		
482	旅する力	沢木耕太郎	新潮社〈289p〉
	『深夜特急』では書かれなかったエピソードや、旅に出るまでの経緯、沢木耕太郎ができるまでとも言うべきデビュー直後の秘話など、旅に関する文章の総決算となる初の長編エッセイ。（「BOOK」データベースより）		
483	ルネサンスとは何であったのか	塩野七生	新潮社〈338p〉
	見たい、知りたい、わかりたいという欲望の爆発、それが.ルネサンスだった。レオナルド・ダ・ヴィンチをはじめ、フリードリッヒ二世や聖フランチェスコ、チェーザレ・ボルジアなど、時代を彩った人々の魅力を対話形式でわかりやすく説く。（「BOOK」データベースより）		
484	父とショパン	崔善愛	影書房〈257p〉
	この悲しみはどこからくるのか…「二度と戻れないかもしれない」という想いをだいて祖国を離れたショパンと父・崔昌華(チォェ・チャンホァ)。米国への留学時に日本国から永住権を剥奪されたとき、著者の胸に、ふたりの悲しみが深く響いてくる。在日三世がつづる国家・民族・音楽への想い。（「BOOK」データベースより）		
485	川は静かに流れ	ジョン・ハート	早川書房〈573p〉
	「僕という人間を形作った出来事は、すべてその川の近くで起こった。川が見える場所で母を失い、川のほとりで恋に落ちた。父に家から追い出された日の、川のにおいすら覚えている」殺人の濡れ衣を着せられ故郷を追われたアダム。（アメリカ探偵作家クラブ賞最優秀長篇賞受賞作）（「BOOK」データベースより）		
486	おそろし	宮部みゆき	角川書店〈429p〉
	17歳のおちかは、実家で起きたある事件をきっかけに、ぴたりと他人に心を閉ざしてしまった。ふさぎ込む日々を、江戸で三島屋という店を構える叔父夫婦のもとに身を寄せ、慣れないながら黙々と働くことでやり過ごしている。そんなある日…。（帯より）		
487	アイルランドを知れば日本がわかる	林景一	角川書店〈224p〉
	アイルランドからアメリカ、イギリス、日本をかんがえる。資源小国としての大いなる生き方。最貧国から世界有数の豊かな国に。日本の“姿見”としてのアイルランドという国家。（「BOOK」データベースより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
488	女三人のシベリア鉄道	森まゆみ	集英社〈349p〉
	晶子、百合子、扶美子、近代文学を代表する女性作家たちの足跡を追い、著者はウラジオストクからモスクワ、パリまでの鉄道を完乗。勇敢な女たちのエネルギーに思いを馳せ、現地の人々の声に耳を傾けながら、旧社会主義国の思い歴史を体感する。評伝X鉄道が合体した傑作ノンフィクション！（帯より）		
489	IN	桐野夏生	集英社〈331p〉
	彼は、小説に命を懸ける、と何度も言った。小説は悪魔ですか。それとも、作家が悪魔ですか？恋愛の「抹殺」を書く小説化の荒涼たる魂の遍路。二つの小説、二つの恋。小説に魂を奪われた者達の恋愛と抹殺の記録。（「BOOK」データベースより）		
490	モリー先生との火曜日	ミッチ・アルボム	NHK出版〈203p〉
	スポーツコラムニストとして活躍するミッチ・アルボムは、偶然テレビで大学時代の恩師の姿を見かける。モリー先生は、難病ALS(筋萎縮性側索硬化症)に侵されていた。16年ぶりの再会。モリーは幸せそうだった。動かなくなった体で人とふれあうことを楽しんでいる。「憐れむより、君が抱えている問題を話してくれないか」モリーは、ミッチに毎週火曜日をくれた。死の床で行われる授業に教科書はない。テーマは「人生の意味」について。（「BOOK」データベースより）		
491	利休にたずねよ	山本兼一	PHP研究所〈418p〉
	おのれの美学だけで天下人・秀吉と対峙した男・千利休の鮮烈なる恋、そして死。 （「BOOK」データベースより）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
492	夜想曲集	カズオ・イシグロ	早川書房〈251p〉
	芽の出ない天才中年サックス奏者が、図らずも一流ホテルの秘密階でセレブリティと共に過ごした数夜の顛末をユーモラスに回想する「夜想曲」を含む、書き下ろしの連作五篇を収録。人生の黄昏を、愛の終わりを、若き日の野心を、才能の神秘を、叶えられなかった夢を描く、著者初の短編集。（「BOOK」データベースより）		
493	クジラは誰のものか	秋道智彌	筑摩書房〈231p〉
	「クジラはとても頭がよくて、神聖な動物」だが「乱獲で絶滅の危機に瀕している」から「食べるなんて野蛮だ」…。いまクジラ問題は環境保護の観点だけでなく、国際政治経済をも巻き込んだ一大事である。けれど、そもそも反捕鯨の国や団体の主張は正しいか。捕鯨は果たして「悪」なのか。どうしても感情的になりやすいクジラ問題を、あらためて歴史的、文化的、地球環境的、経済的に整理。その上で、人類とクジラのあるべき将来像を考察する。（「BOOK」データベースより）		
494	草を褥に　小説牧野富太郎	大原富枝	小学館〈229p〉
	「植物界の巨人」光と翳の実生涯。書簡で初めて明かされる「奔放」と「純愛」。自らを「植物の精」と呼び、植物分類学に生涯を捧げた牧野富太郎博士。この稀代の学者と妻・寿衛子の波乱に富む生涯の詳細記録―『婉という女』から40年。大原文学の最終到達点。（「BOOK」データベースより）		
495	ユニクロVSしまむら	月泉博	日本経済新聞出版社〈277p〉
	かたや単品大量販売のSPA(製造小売)、かたや多品種少量の仕入れ型―。我が国流通業で圧倒的な勝ち組として君臨するユニクロ、しまむらの経営を徹底比較。流通コンサルタントが綿密な取材をもとに、両者の対極的な経営スタイル、成長戦略を分析、日本発小売りスタンダードの魅力に迫る。（「BOOK」データベースより）		
496	白い紙／サラム	シリン・ネザマフィ	文藝春秋〈150p〉
	文学界新人賞受賞作「白い紙」、留学生文学賞「サラム」。大型新人の傑作二作。日本文学界を撃つ、イランからの新しい才能。イラン・イラク戦争下の淡い恋愛物語を描き文学界新人賞を非漢字語圏から初めて受賞した著者は、イラン生まれで滞日10年余り。神戸大学、同大学院で情報知能工学を学び大手電気メーカーでシステム/エンジニアを務めている。2年前に留学生文学賞を受賞した「サラム」も秀作。（「BOOK」データベースより）		
497	天地明察	冲方丁	角川書店〈475p〉
	天明こそ、最高の勝負。江戸、四代将軍家綱の御代。ある「プロジェクト」が立ちあがった。即ち、日本独自の太陰暦を作り上げること――日本文化を変えた大いなる計画を、個の成長物語としてみずみずしくも重厚に描く傑作時代小説！（「BOOK」データベースより）		
498	犬と人のいる文学誌	小山慶太	中央公論新社〈228p〉
	犬は、人類ともっともつきあいの長い動物である。番犬や狩猟犬としてだけでなく、パートナーとしていまや人の生活に欠かせない存在である。人は犬とめぐりあい、いっしょに走り、共に暮らす。しかし犬は人よりもはやく老い、先に死んでいく…。人はなぜこれほどにも犬に愛着をだくのだろうか。本書は人と犬のさまざまな関わり合いを、夏目漱石や向田邦子ね江國香織などの文学作品を通して味わうものである。（表紙裏より）		

	書　　名	著　　者	発 行 所
499	神去なあなあ日常	三浦しをん	徳間書店〈290p〉
	美人の産地･神去村でチェーンソー片手に山仕事。先輩の鉄拳、ダニやヒルの襲来。しかも村には秘密があって…。！？っておもしれ～！高校卒業と同時に平野勇気が放り込まれたのは三重県山奥にある神去村。林業に従事し、自然を相手に生きてきた人々に出会う。（「BOOK」データベースより）		
500	マルガリータ	村木嵐	文藝春秋〈299p〉
	戦国末、ローマに派遣された天正遣欧少年使節。八年後に帰国した彼らを待っていたのは「禁教」だった。四人の内、ある者は道半ばで倒れ、国外に追放され、拷問の中で殉教する。だが、千々石ミゲルだけは信仰を捨てた。切支丹の憎悪を一身に受けながら、彼は何のために生きようとしたのか?ミゲルの苦悩の生涯を、妻「珠」の目から描く傑作。　（「BOOK」データベースより）		
501	江戸っ子はなぜ宵越しの銭をもたないのか？	田中優子	小学館〈222p〉
	大ヒット企画「落語　昭和の名人　決定版」連載に大幅加筆。古典落語３２席から江戸のしきたりや人間関係をひもとき、現代人が忘れてしまった地球に優しい暮らし、金銭より義理人情を重んじる生き方を再発見する。（「BOOK」データベースより）		